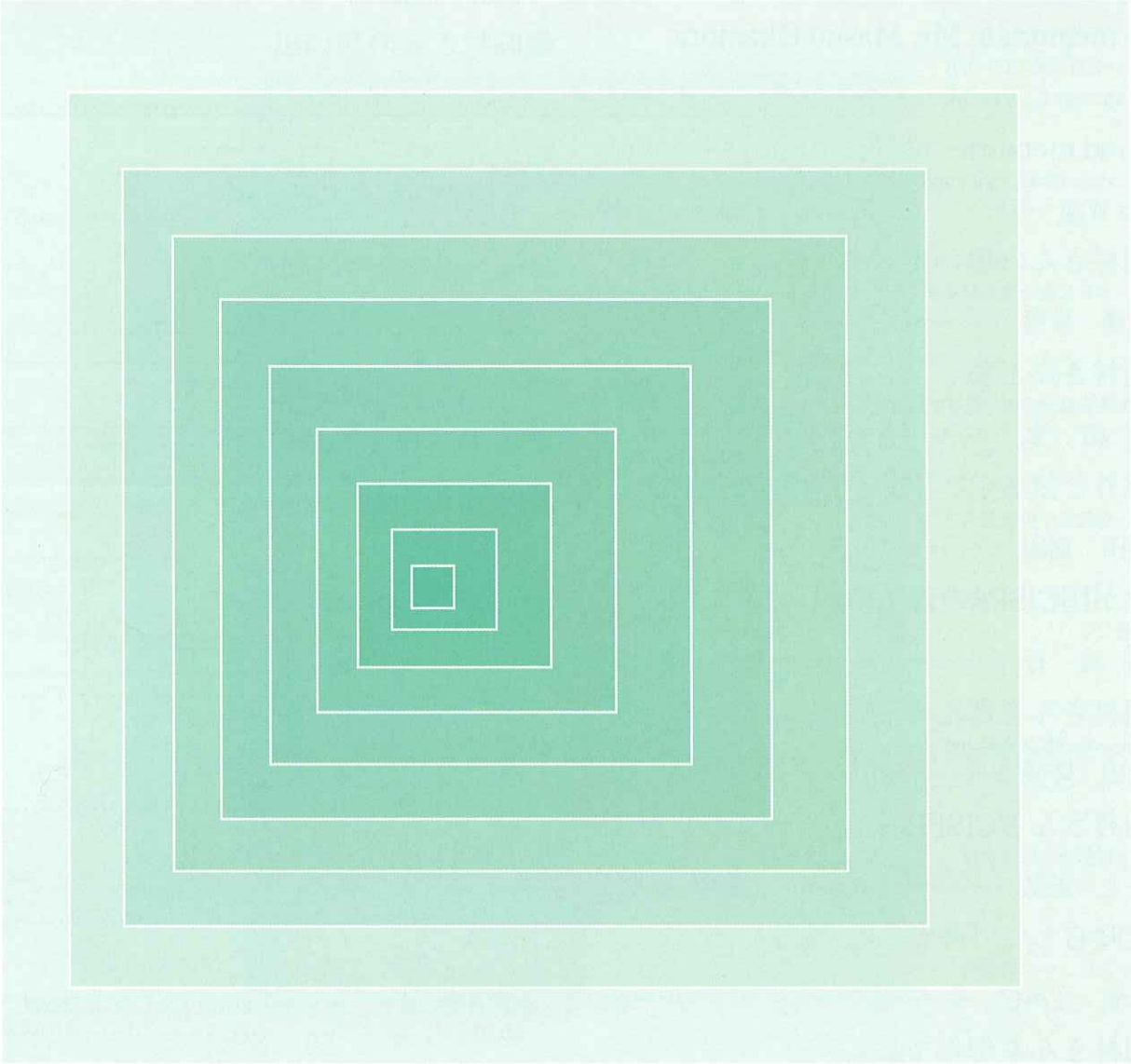
EMCCレポート

岡村万春夫氏 追悼文集



不要電波問題対策協議会

平成13年12月発行

ＥＭＣＣレポート　～岡村万春夫氏 追悼文集～

●岡村万春夫さん(1936.1.3～2001.4.25)の思い出
不要電波問題対策協議会　前会長　顧問
東北大学名誉教授　東北学院大学名誉教授
佐藤　利三郎 …… 4

●岡村さんとCISPR行政
総務省総合通信基盤局電波部電波環境課長
関　口　潔 …… 6

●Reflecting on Mr. Okamura
President CISPR
Peter J. Kerry …… 8

●In memoriam Mr. Masuo Okamura
past chairman CISPR/B
Maarten C. Vrolijk …… 9

●Fond memories of Mr. Masuo Okamura
Associate Chief, Policy and Rules Division
Art Wall …… 10

●岡村さんの思い出
元・ＮＨＫ総合技術研究所
遠藤　幸男 …… 11

●岡村さんと私
能美防災株式会社(元・日本放送協会)
黒　沼　弘 …… 13

●意外と気さくで人懐っこかった岡村さん
元・㈶電力中央研究所
澤田　嘉嗣 …… 14

●我が国CISPRの育ての親
東北大学
杉　浦　行 …… 15

●岡村さんを偲んで
スタンレー電気株式会社
近田　隆愛 …… 21

●岡村さんとCISPR
松下電器産業株式会社
井上　正弘 …… 22

●素晴らしく「キザ」な国際人
オプトウェーブ研究所
結城　主央巳 …… 24

●岡村さんを偲んで
㈶テレコムエンジニアリングセンター（元・ソニー㈱）
細　谷　泰 …… 26

●岡村さんの思い出
情報処理装置等電波障害自主規制協議会(VCCI)
長沢　晴美 …… 28

●CISPR国際人岡村万春夫氏を悼む
CISPR国内委員会前委員長　東北文化学園大学
高　木　相 …… 30

●岡村さんから教わったこと
元・ＴＤＫ株式会社
石　野　健 …… 31

●岡村さんからいただいた数々のご指導
国立教育政策研究所
清水　康敬 …… 32

●総務省と経済産業省の
両方でご活躍された岡村さん
武蔵工業大学
徳田　正満 …… 34

●岡村さんの想い出
NTTアドバンステクノロジ㈱
雨宮　不二雄 …… 35

●JQA岡村さんを偲んで
㈳関西電子工業振興センター(KEC)
長岡　文俊 …… 37

●永遠の宿題を頂く
㈶テレコムエンジニアリングセンター
市野　芳明 …… 38

●岡村万春夫さんの思いで
独立行政法人　通信総合研究所
篠　塚　隆 …… 39

●岡村万春夫さんを偲んで
日本電気㈱
鈴木　健次 …… 40

●真の国際人岡村さん
CISPR運営委員会　委員／CISPR国内委員会　委員長
育英工業高等専門学校
仁田　周一 …… 42

●岡村さんの想い出
独立行政法人　通信総合研究所
山中　幸雄 …… 44

●岡村万春夫さんの思い出
株式会社NTTドコモ
野島　俊雄 …… 46

●あとがき　追悼の辞
不要電波問題対策協議会会長／名古屋工業大学　名誉教授
池田　哲夫 …… 47

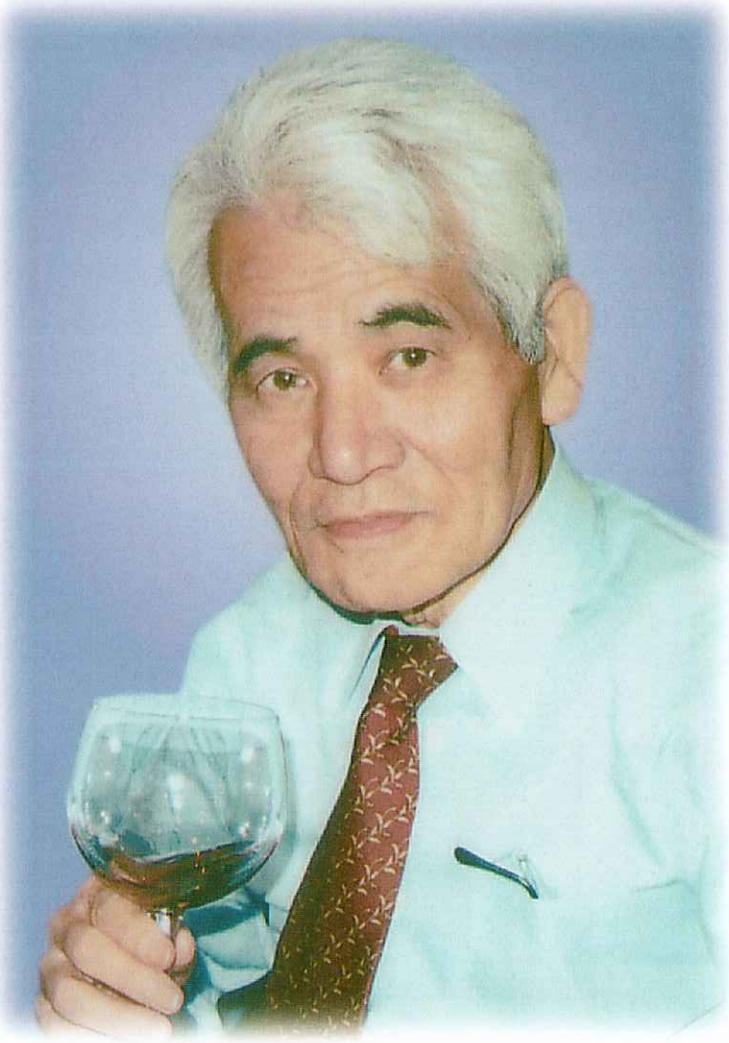
●岡村万春夫氏の御業績 …… 49

●CISPRの審議組織 …… 50

●CISPR国際会議出席状況 …… 51

EMCCレポート

岡村万春夫氏　追悼文集



故　岡村万春夫氏

岡村万春夫さん（1936.1.3～2001.4.25）の思い出

不要電波問題対策協議会　前会長　顧問
東北大学名誉教授　東北学院大学名誉教授
佐藤　利三郎

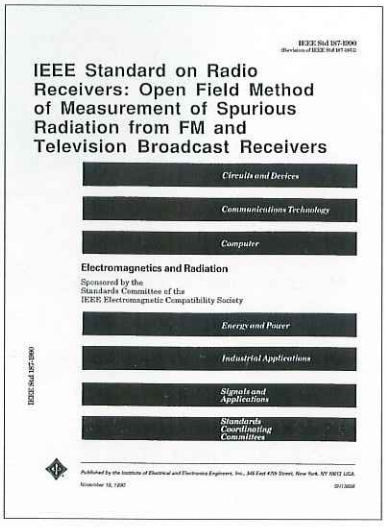
今年の４月25日、岡村万春夫さんが御病気のためお亡くなりになったとの連絡をいただき、あまりに突然のことで信じられない思いで、柏モールで行われた葬儀に駆けつけました。遺影に対面しながら、65才の若さで、これからご活躍なさる方なのにと惜しみきれない気持ちでございました。

岡村さんは温厚、実直で面倒見が良く、誰からも信頼をされる方であり、一方電波技術では抜群の実力をお持ちの、本邦屈指の優れた専門家でありました。国内はもちろん欧米の専門家との交流も多く、特に国際無線障害特別委員会CISPRの日本代表として、故蓑妻二三雄委員長を補佐し、蓑妻先生の亡き後は先生の後をついで指導的立場に立っておられました。かけがえのない存在であられた岡村さんを失ったことは、誠に残念でなりません。

岡村さんと私の出会いは、岡村さんがJMI（現日本品質保証機構）の電波課長から電波部長になられた1970年代のことだったと思います。郵政省の電波技術審議会第３部会に大学から出席していた私はCISPR会議の報告などで岡村さんとお話するようになりました。

岡村さんと一緒に仕事をするようになったのは、JMI主催の「スタンダードコードへの対応についての調査研究」委員会を作るときでありました。その前年の1981年８月19日に米国のボールダー（コロラド）で開かれたIEEEのStandard Committeeの席上で、課題番号187-1955（Open Field Method of Measurement of Spurious Radiation from FM and Television Broadcast Receivers）が審議され、このスタンダードが30年以上経過しているため、改正のためにWorking groupを立ちあげることになり、その仕事をIEEEの日本の会員を中心として行うことに決定しました。私は帰国後郵政省、通産省や多くの方々と相談しましたが、中々まとまりません。それをとりまとめてくれたのが岡村さんでした。1982年５月６日機械電子検査検定協会（JMI）の会議室で第一回の会合が行なわれ、調査研究の計画の中にIEEE std. 187の修正案の作成作業が入り、岡村委員がその修正案のたたき台を作成することになりました。これで187の修正作業は軌道に乗り、Working groupの委員（日本11名、米国19名）がDraftを４回改正し、187-1990が完成しました。図１はその

図１



IEEE Std 187-1990
(Revision of IEEE Std 187-1955)

IEEE Standard on Radio Receivers: Open Field Method of Measurement of Spurious Radiation from FM and Television Broadcast Receivers

Circuits and Devices

Communications Technology

Computer

Electromagnetics and Radiation

Sponsored by the
Standards Committee of the
IEEE Electromagnetic Compatibility Society

Energy and Power

Industrial Applications

Signals and Applications

Standards Coordinating Committees

IEEE Std 187-1990

Published by the Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc., 345 East 47th Street, New York, NY 10017 USA.

November 12, 1987

SH13050

表紙であります。IEEE EMCのスタンダードは殆ど米国の人々からなるWorking groupで作られていて、日本の人々が協力して完成したことは大変めずらしいことですが、これも岡村さんのご尽力の賜と感謝しております。

岡村さんはJMIの電波部長、そして電波試験所所長をなさるかたわら、国際会議の日本代表となって活躍されました。1984年、IEEE／EMCの国際シンポジウムが東京で開催されたときも大変貢献して戴きました。

1987年にはJMI妨害波自動測定委員会のアメリカ視察団でご一緒したり、1990年には不要電波問題対策協議会主催の欧州調査団でイタリア、英国、ドイツ、スウェーデンをご一緒に歴訪いたしました。(写真)

今年８月EMCの国際会議がカナダのモントリオールで開催され、187-1990の再度の改正について審議されることになっておりました。TV放送やFM放送がアナログからデジタルに変更されるにあたって、187スタンダードも改正する必要が出てきたのです。前回と同様に日本が協力することになっており、私も岡村さん、杉浦さん、岡崎さん（ソニー）と共に出席することになっておりました。岡村さんは出席することは出来ませんでしたが、岡村さんの考えていた方向で新しいスタンダードが出来ていくことと思います。

岡村さんは経験から二つのことを私によく話していました。一つは国際会議や学会でどんどん発言して互いに意見を交わすようにしてほしいこと。二つめは我々はEMCをよく勉強しなければならない、少なくとも三次元の現象をマスターするためベクトル解析ぐらいは十分勉強しておいてほしいということでした。二つとも簡単なことではありませんが、岡村さんの意志を継ぐ者としてそれに応えられるよう努力したいものと思います。

1990年不要電波問題対策協議会　欧州調査団
（英国電波庁の前で、筆者、田代、岡村、杉浦の各氏）

岡村さんとCISPR行政

総務省総合通信基盤局電波部電波環境課長
関　口　　潔

私と岡村さんとの係わりは、昭和61年当時、郵政省（当時）が不要電波問題懇談会を立ち上げた時に遡ります。ご記憶の方もおられると思いますが、当時「不要懇」という略称で呼ばれ、現在の「不要電波問題対策協議会」の前身に当たるものです。電波環境問題について全くの素人であった私が不要懇の事務局を担当することとなり、岡村さんから懇切なる御指導を賜ったばかりか、多方面の方々をご紹介いただき、どうにか郵政省として不要電波問題に取り組む足がかりを作ることができました。また、岡村さんは通産省（当時）の関係法人におられながら、「省庁の所掌など関係無い、日本の電磁環境を整備してくれる省庁が担当すればよい」と言われ、郵政省、通産省に分け隔てなく精力的に貢献されていたことがあまりに印象的でした。

そして現在、私は電波環境課長としてCISPRを始めとする電波環境行政を推進する立場にあるわけですが、今回、岡村さんが御逝去されたということは、私に限らず、我が国の、そして世界の電波環境整備に携わる者にとって、大きな柱を失った思いであろうと痛感しております。

岡村さんは1974年からCISPR国際会議に出席され、1988年からはCISPR／SC－Bの国際幹事を、本年４月25日にお亡くなりになるまで長年に渡り務めてこられました。一方、国内においても我が国のCISPR国内審議団体であるCISPR委員会の活動に指導的な役割を果たしてこられ、最近ではCISPR11の国内規格化や我が国のCISPR／SC－I幹事国選出に御尽力されており、その最中での御逝去でした。

ここで岡村さんが御逝去されたときのCISPR委員会事務局（電波環境課電磁障害係）の混乱状況について、岡村さんの活躍の様子を語り継ぐ上でのエピソードとしてご紹介させていただきたいと思います。

岡村さんの訃報が総務省に届いたのは御逝去された日の夕刻のことです。翌日のCISPR委員会Ｅグループ（無線受信機担当）会合の審議のための資料作成に追われていた時でした。事務局は直ちにCISPRの関係者を始めとする電波環境課が平素からお世話になっているＥＭＣの関係者に岡村さんの訃報をお知らせしましたが、当時はCISPR委員会の各グループにおいてCISPRブリストル会議への対処方針が審議されている最も多忙な時期でした。我々CISPR関係者は、何か問題が起こるとまず岡村さんに相談に乗っていただくといった体制で仕事を進めてきたのですが、急にその柱を失い、また岡村さんの御逝去によりCISPR関係者の業務に多大な影響を与えており、国内のＥＭＣ関係の方々の混乱振りは簡単には言い尽くせない状況でした。この状況の中で、CISPR委員会事務局は悲しむ間もなく、連日開催される会合の再調整などで対応に追

われ続けました。

最も苦慮したのが、岡村さんが務められていたCISPR／SC－B国際幹事、我が国のCISPR委員会Bグループ（工業・科学・医療用高周波装置担当）主任、CISPR11国内規格化答申作業班主任についての対応です。特にCISPR／SC－B国際幹事の引継ぎについては、岡村さんのご尽力で国際社会における我が国の信頼を築き上げてきており、各国からも我が国に対する期待が非常に高いため、慎重なかつ迅速な対応を迫られました。非常識ではありましたが、やむなく岡村さんの御葬儀終了後に、参列されておりました仁田先生、杉浦先生を始めとする主要な方々に集まっていただき、対応を協議させていただきました。その際も、本来であればこのような重要な事態に最も頼りとなる岡村さんから意見を伺うことができないことについて、困惑するとともに、岡村さん御存命中のありがたさを実感することとなりました。

それから約２ヶ月後、CISPRブリストル会議が開催されましたが、この会議において、総会の議長挨拶の後に、議長自らが岡村さんの訃報について報告されました。参加者の多くは事前にこの訃報について承知しておりましたが、改めて議長から岡村さんのCISPRに対する活動、功績、そしていかにSC－B国際幹事として貢献されてきたかが紹介されますと、改めて岡村さんのCISPRにおける存在の大きさを再認識させられることとなりました。

今回の総会では組織体制の改編が主要な議題となり、マルチメディア機器を担当する新たな小委員会としてSC－Ｉが設置されたわけですが、そのSC－Ｉの幹事国として我が国を始め、米国、イタリアの３ヶ国が立候補し、我が国が圧倒的多数で選出されました。この幹事国選出のために我が国はCISPR委員会の関係者を中心として積極的に活動を行ってきており、特に岡村さんを始め我が国のCISPR活動において中心的な役割を担っていただいている仁田先生、杉浦先生には大変な御尽力いただいたところですが、我が国が圧倒的支持を得て選出されたのは、これまでの岡村さんをはじめ、多くのCISPR関係者のたゆまない努力により、CISPR国際勧告の作成を始めとするCISPR活動に対する幾多の貢献が国際的に認められたものであると確信しております。

このような岡村さんの功績を偲び、去る９月27日に開催された不要協主催のCISPRブリストル会議報告会では、杉浦先生から岡村さんのこれまでの功績や御活躍について講演していただきました。参加者は杉浦先生の講演を通し、岡村さんの成し遂げられた功績を通じて、我が国のCISPR活動の歴史、そして我が国の現在のCISPRにおける国際的立場を理解されたと感じております。

21世紀を迎え、中央省庁再編に伴いCISPR委員会は電気通信技術審議会から情報通信審議会情報通信技術分科会の下に再編されましたが、その際に岡村さんの強い御指導により、当委員会は、事務局運営の効率化、運営規則の改正、CISPRに派遣されているエキスパートを中心とした専門委員構成への見直しなどの抜本的改革を行い、審議体制の改善を図ってまいりました。また、岡村さんは、CISPR活動の将来に向けた方向性について、お考えを一部ながらも我々に示してこられており、我々CISPR関係者にとって貴重な人材を急に失うことになりましたが、我々は岡村さんが示された道しるべに従い、岡村さんの遺志を引継いで邁進してまいる所存です。

最後に、我が国のCISPR活動に献身された岡村さんに深く感謝すると共に、心から御冥福をお祈り申し上げます。

Reflecting on Mr. Okamura

President CISPR
Peter J. Kerry

At my first CISPR meeting, Mr. Okamura was one of the first people that I was introduced to, for my task was to be secretary of the CISPR/B Working Group. That initial meeting left me with an impression of a quiet, polite gentleman that was standing on a wealth of experience. The following years were to reinforce this impression, as I served my 'CISPR apprenticeship.' As Secretary of CISPR/B, he helped me with my Working Group task in that same quiet way, with impeccable advice always available whenever it was needed. It was as though he knew when I needed advice. As I look back to those early years, I can see not only how effective he was in his task, but also how much I learned from him.

When I was appointed as President of CISPR, we still retained the same relationship. I always knew that if he wanted to speak with me it was some important advice that he had to give me. It usually came in the form of a question that would set me thinking about something that I had overlooked. The elegance of this approach was one of the things that I learned from him, and this has greatly helped me in my career, both inside and outside CISPR.

On hearing of his passing, I was naturally very sad at what was an unexpected event- he was a part of CISPR, and somehow I had the unrealistic expectation that he would be there long after I left. Living on the other side of the world, one is somewhat isolated from the reality; it was only when CISPR met in Bristol a few months later that his passing became real to me. As in the large meeting hall we all quietly reflected on Mr. Okamura's passing, I realised that a great man had left us. Yet I know that all who knew him couldn't have failed to have received something from him. It may not be tangible or quantifiable, but that part of him is an inheritance that will continue to live on. Mr. Okamura was well known as the secretary of CISPR/B, but in reality he was much more than this, he was my friend and a friend of CISPR. I will never know the full depth of that wealth of experience that he had, but I know that I shall greatly miss his advice as will CISPR.

1999年CISPR/San Diego会議において（左から杉浦、

In memoriam Mr. Masuo Okamura

past chairman CISPR/B
Maarten C.Vrolijk

My first acquaintance with Masuo goes back to the mid-eighties, when in CISPR the measurement method with the reverberating chamber was in discussion.

Two experts were leading the debate: Mr. Hoki Kwan (UK) and Mr. Masuo Okamura, both had performed measurements and both had handed in interesting technical papers.

A much closer relationship started after the CISPR meeting in York in 1990, when I was asked to become the chairman of CISPR/B of which Masuo was secretary for many years already. What stroke me was his friendliness and his willingness to support a newcomer.

Over the years of co-operation I have esteemed him as a real gentleman. With his enormous knowledge of CISPR/B matters he helped me first, and later challenged me. It was our little play to prepare the agenda for the next meeting. He was very careful to be complete in the first draft, but on rare occasions I could add a new subject (often related to the European developments) or give the agenda a more logic sequence. As secretary he considered it his honour to hand over to me the daily minutes, the morning after the meeting. That must have cost him the biggest part of the night. He was eager to see my corrections to improve his English and to learn for the next time.

He was far much more than me a consensus-builder. He argued several times with me to re-issue a CD or CDV with the most important comments incorporated to gain more support, in stead of going to the next stage.

I will remember him as a very pleasant person, always behaving like a gentleman, with a broad technical knowledge.

The current standard CISPR 11 is for a big part based on his diligence and skills.

SC/B委員長・Mr. Vrolijk、仁田先生、CISPR議長・Mr. Kerry）

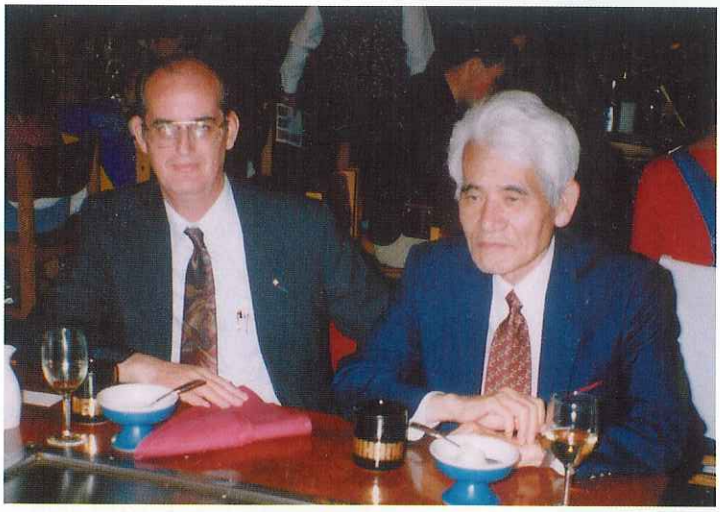
Fond memories of Mr. Masuo Okamura

Associate Chief, Policy and Rules Division
Office of Engineering and Technology
Federal Communications Commission U.S.A.
Art Wall

Mr. Masuo Okamura was a fine gentleman and outstanding driving force in the implementation and development of Electromagnetic Compatibility (EMC) technology in Japan. He will be missed by many, but like his friends and close colleagues, I will always remember with fondness the many experiences and good times that I had with Mr. Okamura. He will never die in my heart. The following is a few of my memories of that find gentleman.

I first met Mr. Okamura in 1975 during one of his many trips to the United States Federal Communications Commission. At that time, he struck me as a very hard working and dedicated individual. However, it was not until 1979 at the International Special Committee for Radio Interference (CISPR) meeting in The Hague that I began to work with and get to know Mr. Okamura. At the next CISPR meeting, he showed me kindness and friendship by showing me some of the sights of Japan.

Over the next twenty years, Mr. Okamura was always an active technical contributor to CISPR with contributions on such projects as the reverberation chamber, microwave limits, etc. In the 1980, he was an active member of the joint CISPR and Interim Working Party 1/4, subsequently renamed Task Group of the ITU International Radio Consultative Committee



1999年CISPR/San Diego会議において（岡村さんとMr. Wall）

(CCIR) responsible for developing in-band and out-of-band limits for Industrial, Scientific and Medical (ISM) equipment. Mr. Okamura and I spent a lot of time completing that work, but I also remember the good times we had together exploring Paris and Versailles after one of the many meetings of that committee.

In the early 1990's, Mr. Okamura became Secretary of CISPR Subcommittee B, which is responsible for developing limits and methods of measurements for ISM equipment. He served with distinction and honor in that position. He was also responsible for organizing and arranging the memorable CISPR meetings, which were held in Yokosuka, Japan. His presence and organizational skills was also recognized at a number IEEE EMC Symposiums that I attended in Japan.

On another level, Mr. Okamura was always kind to me when I came to Japan. He went out of way to show me Japan's true beauty in both its people and landmarks. I also had the privilege of showing Mr. and Mrs. Okamura the beauty and highlights of Washington, D.C. I will forever remember those times together with much fondness.
May Mr. Okamura rest in peace, but also may the memories and outstanding work of Mr. Okamura never be forgotten.

岡村さんの思い出

元・NHK総合技術研究所
遠藤　幸男

岡村さんが亡くなられたとの連絡を受けた時、しばらく信じられなかった。私よりだいぶ若い岡村さんの思い出を、こんな形で書くことになり、誠に残念でならない。

岡村さんとは、電波技術審議会（第３部会）、CISPRなどの会議で、長い間ご一緒した。はじめに強く印象に残っている思い出は、電波技術審議会が「ビデオからの不要放射」の審議をしており、私が分科会のまとめ役を引き受けたばかりの頃である。今は亡き岡さん（当時、日本電子機械工業会顧問）とご一緒に私の研究室においでになり、“アメリカでは、もっと厳しい限度値をまとめようとしているので、本年度の答申を延期するよう当局と話し合ってほしい”ということだったと思う。当時はホームビデオの開発競争の最中で、業界は岡村さんのFCCとの強いつながりを頼りにしていた。若くしてすでに、EMCに関するリーダーの役を果たしておられたと思う。

CISPRの会議では、ニースとドブロブニック会議にご一緒した。ニース会議は、私にとって今のSC組織になってはじめての会議であった。また、日本はロンドン、モントルーと出席し、もうお客様扱いではなく、情報を取るだけではなくもっと寄与してほしいなどといわれた。会場は晴海の展示場のような所を仕切って会議室を急造したもので、しゃ音効果が悪く聞き取りにくく苦労した。岡村さんはロンドン会議以来連続して出席しておられ、会議報告はじめ中心になって活躍され、だいぶ助けてもらった。ニース海岸で皆んなで夕食をした時、“ここではやはりブイヤベースだろう”といって手配され、“私はあまり好きではないが”と

岡村さんと著者
（ニース海岸にて、1976年）

ドブロニック会議
（1977年　右・岡村さん　左・宮島さん　中央・著者）

いっておられた時のことを思い出す。写真はそのニース海岸でとったものである。

ドブロブニック会議にもご一緒したが、往路は２人でオランダのアムステルダムに１泊してユーゴスラビア入りした。ドブロブニックは、アドリア海に面した実に静かな市で、当時は平和そのものだった。この頃になるとメンバーも固定して来て、少しは余裕が出て来たように思う。私にとっては一番楽しいCISPRだった。写真は会場となったホテルの海岸でとったものである。

そして東京会議、事務局をJMI（現JQA）が引き受け、岡村さんは亡き蓑妻先生のリーダーシップのもとで、実質的な面で活躍され、日本ではじめてのCISPR会議の成功に、大いに貢献なされた。

電波技術審議会では、CISPRの公報を和訳して答申することが、宮島さん（電波研究所）が中心になり数年続いたと思う。当時はEMCの分野での訳語はまちまちであり、公報の内容の解釈も疑問が多かった。宮島さんは岡村さんを頼りにしており、夜遅くまで議論することがよくあった。

また、電子情報技術装置のCISPR22の答申をまとめたときの分科会主任は岡村さんだった。そしてわが国としてはじめての業界自主規制となったVCCI規制がスタートした。その頃、私はもうNHKを卒業していたが、業界のEMC委員会に関係していたので、時々会う機会はあった。CISPR22の国内答申の時だったか、国際規格公示の時だったか忘れたが、広い会場一杯の聴講者を前に、CISPR22について堂々と講演しておられた。国内規制がはじまるということもあってすごい熱気だった。終わった後で、“よくまとまりましたね”と声をかけたら、うれしそうに、しかも誇らしげにしていた岡村さんの姿が、今でも強く印象に残っている。

その後も、不要電波問題対策協議会の委員会、JMIの研究会などでご一緒することがあったが、私にとってはよき情報源であり、いろいろと教えて頂いた。会が終わるとよく若い人達の面倒を見ておられた。時にやせておられたこともあったので体調を尋ねても、“大丈夫”とだけで、あまり話をされなかった。若い人達に酒を勧めながら自分はあまり口にしなかったこともあったと思う。

こう振り返ってみると、本当に「人生のすべてをEMCにかけた男」が岡村さんだったと思う。もっともっと長く、日本のEMC、世界のEMCのために尽して欲しかった。心からご冥福をお祈り申し上げます。

岡村さんと私

能美防災株式会社（元・日本放送協会）
黒沼　弘

私と岡村さんとの出会いは、電波雑音の規格を担当していた電波技術審議会（現在の情報通信審議会）・第３部会の会議の席ではなかったかと思われますが、それが何年頃だったのか私には定かな記憶がありません。同審議会では、1968年頃から放送用受信機から発生する電波雑音の規格についての審議を始めていましたが、当時、NHKの技術研究所に勤務していた私は、放送の受信障害を起こさないように規格値を定めてもらうよう、受信障害のデータを取るなどの協力をしていました。当時のJMI（機械電子検査検定協会）に勤務されていた岡村さんも審議会に出席されていたと思われ、その席でお目にかかっていたのではないかと思いますが、私は出席されていた方々の名前をほとんど覚えておりません。

私が初めて岡村さんとご一緒に仕事をしたこととして記憶にあるのは、1975年に初めてCISPRのスイス・モントルー会議に出席したときのことです。CISPR会議に日本の代表が本格的に参加し始めたのは1973年からですが、NHKからは何人かの職員が交代で出席することになり、私は1975年に、勉強のために会議に行ってこいと上司に言われ、出席することになりました。私にとって初めての外国出張であり、不安いっぱいの状態で出かけましたが、そのときにご一緒したのが、一昨年亡くなられた蓑妻先生を筆頭に、岡村さんやその他の方々でした。岡村さんは、前年のロンドン会議にも出席されていて会議の様子もご存知であり、また、外国の生活も経験されていて英語もお得意と、私にとって大変心強い存在でした。岡村さんには、この会議のときに色々と教えて頂きましたが、このとき以後も内外の電波雑音規格の審議に関連して、色々とお世話になることになりました。

NHKは放送の受信を電波障害から守るといった立場から、CISPR会議の内容を全般的に把握することを心がけて会議に出席していましたが、特に放送用受信機に関しては、当時のEIAJ（日本電子機械工業会、今の電子情報技術産業協会）と協力して受信機関係の小委員会（SC-E）の審議を担当していました。岡村さんも試験機関の立場から受信機関係の作業班（WG）にメンバー登録していて、受信機関係の審議に関しては、NHK、EIAJ、JMIが協力して日本の意見をまとめるという形になっていました。CISPR会議への提出文書を相談しながらまとめ、特に英文への翻訳を岡村さんに全面的にお願いし、会議に提出したことを思い出します。

私は、モントルー会議以後1994年の北京会議まで、20年間に２年に１回程度の間隔でCISPR会議に出席しましたが、岡村さんはこの間１度も休まず、またその後も毎回の会議に出席し、受信機関係の規格改正に尽力されてきました。それだけでなく、岡村さんが高周波利用設備関係の小委員会の幹事を引き受け、各国意見の調整などの難しい仕事をこなしておられたのは皆さまご存知の通りです。

1981年　筆者と岡村さん

わが国の電波技術審議会・CISPR委員会では、CISPR会議の結果を受けて日本がどう対応するか、CISPRで定められた規格をどのように日本の規格に適用するかの審議が行われましたが、ここでも岡村さんは、CISPR会議・小委員会の幹事としての立場、国内の試験機関としての立場、CISPR会議出席者として業界の方々に会議の流れを説明し、納得してもらわなければならない立場などの複雑な状況の中で、困難な仕事をしておられました。

CISPR会議出席の折には、休みの日に仕事を離れて近くの観光地に出かけ、骨休めしたこともありました。モントルー会議のときに登山電車に乗ったこと、ハーグ会議のときにチューリップで有名なキューヘンホフの公園に行ったこと、トロント会議のときにナイアガラの滝を見物したこと、シドニー会議のときに動物園でコアラを抱いたことなどが懐かしく思い出されます。掲載した写真はトロント会議（1981年）のときにナイアガラの滝観光に行ったときの岡村さんと私です。岡村さんは1937年生まれ、私が1938年生まれという１つ違いの同年代の２人ですが、20年前の43～44歳頃の私たちは２人ともまだ若々しく(?)写っています。

私は北京会議出席後、NHKを定年退職する数年前にＥＭＣ関連の仕事を離れ、その後岡村さんとお会いすることも少なくなりました。私が最後に岡村さんにお会いしたのは、今から１年程前にお願い事があってJQAをお訪ねしたときです。最後まで岡村さんにお世話になってしまいました。そのときは以前と変わらずお元気な様子でしたので、今回、岡村さんの訃報をお聞きして、まさか、まさかと耳を疑うばかりでした。

30年近くにわたって世界を駆け巡り、心労の重なるような仕事を続けられた岡村さんでした。一生を電波雑音の改善に尽力された岡村さんでした。その間、私は20年以上の間、親しくお付き合い頂き、色々と教えて頂きました。そのご厚情に深く感謝し、心からご冥福をお祈り致します。

意外と気さくで人懐っこかった岡村さん

元・㈶電力中央研究所
澤田　嘉嗣

今も元気でCISPR業務のために粉骨砕身頑張っておられるものと、陰ながら思っておりました。それが、Ｓさんから電話があり、実は云々と言うことで、と岡村さんの死を知らされましたときは、驚き、なにかの間違い電話では、と一瞬夢の中での出来事のような気がしました。岡村さんの追悼文を、という文書を手にして、はじめて本当なんだというように思った次第であります。今の長寿の世の中、自分より若い人が先に死ぬなんて、考えられないではありませんか。

私の印象では、岡村さんという人は、すごく真面目で、曲がったことが嫌いで、仕事一途の勉強家というような人でありました。岡村さんとCISPRの内外の委員会で、ご一緒したことは数えきれないほど多くあったと思っておりますが、親しく時間を共にしたことは殆ど無かったと思います。従って、岡村さんを懐いますに、あの人の外面しか見て知っていないということであります。その私が岡村さんの追悼文を書かせて頂くのは、まことおこがましい限りだと思います。実は、追悼文をとＳさんから頼まれましたとき、ふと、お断りしたほうがよいな、と思ったのです。ですが、次の瞬間には、CISPR会議での岡村さんの風貌が目に浮かび、何か書かせて頂かねばと思いました。それは、私のCISPR関係におきまして、岡村さんは印象の濃い人

のひとりであったからだと思います。

真面目一方のように見える岡村さんですが、私が感じましたところでは、大変に気さくな人で、意外と人懐っこい面があったように思います。CISPRの事に関しましては、殊の外詳しく、良く理解しておられたようで、我が国ではCISPRに最も良く通じていたひとりの人ではなかったでしょうか。蓑妻先生とご同様に、言わばCISPRの主であったと言えるでしょう。CISPR会議のことで、お訊きすると、どんなことでも、偉ぶるところなく、やさしく説明して頂きました。親しみの持てる温かみのある人でした。

岡村さんを最初に見たとき思いましたのは、その風貌、体型、雰囲気から、上野公園に厳然と立つ西郷さんでした。岡村さんは少々小柄ですが、何となく似ているように感じました。どこか毅然としたところがあり、ものごとに容易なことでは動じないと言った精神が感じられました。

我が国のCISPRの活動において、惜しい人がまた一人亡くなってしまったと深く感じております。我が国のCISPRの歴史において、その名がいつまでも残るひとりの人であります。岡村さんが残された業績を、しっかりと踏まえて、我が国のCISPR活動が益々発展することを祈ってやみません。

1979年オランダ・ハーグ会議の時訪れたキューケンホフ花園（左から田中氏、黒沼氏、岡村さん、故蓑妻先生、筆者）

我が国CISPRの育ての親

東北大学
杉浦　行

最初の出会い

岡村さんの話では、私が彼に初めて会ったのは、1973年頃にNHK技術研究所で開かれた電波技術審議会・第3部会・規格分科会の検討会のようである。その頃、我が国はCISPR規格の妨害波測定法（CISPR Pub. 1～4：現、CISPR 16）を国内規格として初めて導入することになり、その規格の妥当性を詳細に検討していた。例えば、私が属していた郵政省電波研究所（現、通信総合研究所：CRL）の宮島貞光氏の研究室では、妨害波測定器の応答を計算機シミュレーションによって研究していた。その結果の一部を私が検討会で報告したのが岡村さんの目に留まったようである。その頃の我が国のCISPR体制は揺籃期で、リーダの故蓑妻二三雄先生の指導の下、遠藤幸雄さん（NHK）、宮島さん、岡村さんが主要メンバーだったと思うが、30才の若輩で緊張しまくっていた私はその検討会を殆ど覚えていない。

岡村さんがCISPR活動に加わったのは、蓑妻先生の推薦によるものである。岡村さんの略歴にも書かれているが、日本機械金属検査協会（JMI：現、日本品質保証機構）に就職して間もなく、彼は市民ラジオ（CB）無線機の輸出検査に携わることになり、米国の

電波法規を勉強するために連邦通信委員会（FCC）の部長Mr. Dicksonの家に３ヶ月ほど寄宿した。そこで、真面目で勉強家の岡村さんはMr. Dicksonのみならず、奥様にも大変気に入られ、夕方、彼が家に戻ると直ぐに奥さんから話しかけられ、逃げ出したくなるほど英語の特訓を受けたようである。彼の英語は、その後の猛烈な努力によって、外人から「何処で習得したのか」と聞かれる位いに上達した。また、Mr. Dicksonは、無線システムの技術基準等を定める国際無線通信諮問委員会（CCIR、現ITU-R）の小委員会（SG-1）の委員長であったため、日本を訪れる度に、郵政省に岡村さんを通訳代わりに同伴した。この縁で、岡村さんは、当時の電波監理局の局長など技術系ボスとの面識ができ、例えば電波研究所では、歴代の通信機器部長が岡村さんと酒を酌み交わすぐらいに仲良しになった。官尊民卑の時代、通産省の外郭団体の若手課長さんが、郵政省でこのような優遇を受けるのは極めてまれで、岡村さんの人柄と能力が広く認められた結果である。このような背景から、郵政省のOBであった蓑妻先生の目に留まり、CISPRを担当する電波技術審議会第3部会の作業に誘われたのである。このように、EMC分野における岡村さんの御活躍の土壌は、彼が30才時代に出来上がった。

ホテルで同室

私と岡村さんとの深い付き合いが始まったのは1979年のCISPRハーグ会議からである。突然、私が会議に出席することになったが、そのとき宮島さんから、「君は海外が初めてで心配だ。だから、英語がペラペラで海外経験も多い岡村さんに頼んである。彼の後ろについて歩きなさい」と云われた。さらに、「CISPR会議では寄与文書を英語で紹介するが、その英文や発音などは、事前に岡村さんのチェックを受けなさい。我々もチェックしてもらっている」と忠告された。当時、43才の岡村さんが、10才ぐらい先輩の宮島さんや遠藤さんに如何に信頼されていたかを如実に物語っている。

このお陰で、私は岡村さんとオランダのホテルで同室することになったが、その18日間はハプニングの連続で非常に印象深いものであった。例えば、ヒルトンに泊まったとき、私がワイシャツをクリーニングに出したらコートが戻ってくるし、岡村さんが上着を出したら男物のパンツが戻ってきて驚いた。また、チェックインの時、岡村さんが間違えて出発日を１日早めに書いたため、ホテルを放り出されてしまった。岡村さんは面目丸つぶれで大いに慌てたが、仕方なく郊外のホテルに１泊することになった。これが雑魚寝の宿屋で、見知らぬ６人が相部屋で（カーテンで仕切っただけ）、シャワールームも一つで共用であった。兎に角、私の最初の海外旅行は、岡村さんにとっても大変想い出深く、彼はこの話を何度もしたため、CISPR関係者では有名な話である。

語学力と厳しい指導

宮島さんの忠告もあって、その後、私は長い間、岡村さんに英語をチェックしてもらうことになった。例えば、1980年のCISPR東京会議では、私が作った英文を彼に見せたところ、「この英語は全文、書き直した方が良い。日本語で内容を言って下さい。逐次、英文タイプしますから」と云われた。これだけ徹底的に言われると普通は屈辱感を感じるものだが、自分の日本語が岡村さんによって即座に英語になるのを見ると、屈辱感より、彼の能力に対する羨望と、自分の非力を恥じ入った。それ以後、毎年、岡村さんと一緒にCISPR会議に参加したが、私が英語をしゃべると、いつも厳しい注意を受けた。「杉浦さんのは、一見、英語風の日本語。英語を勝手に作ってはダメだ。native speakerの英語を借用しなさい」と云われた。また、毎日のように親しい外国代表を招いて会食し、私が英語を話す機会を作ってくれた。さらに、「ただで英語が勉強できるのだから」と云って、飛行機の中、ホテルのバーなど至る所で、隣の外人に話しかけることを強制した。私は英語が苦手だから、強制されるのが嫌で、彼の誘いを避けるようになった。近年、このような進歩のない私を見限ったのか、彼は私に小言を云わなくなった。

岡村さんの英語力は素晴らしかったが、日本語は下手だった。思考過程が英語風なのか、彼の文章は英文解釈調で、非常に読み難いものであった。私は「英語の敵を日本語で取ろう」と思い、何度も彼にそのことを指摘した。その結果、彼にお願いしたEMCに関する書籍の原稿を私が全面的に手を入れても、彼は何も文句を云わなかった。また、彼は少し気短だから、委員会で他の発言者に対して、「貴方は誤解している！他人を誤解させるような事を云わないこと！もう一度、勉強し直した方が良い！」などと痛烈な言葉を浴びせて、会議の雰囲気をしばしば気不味くした。だからセミナーなどで、私は「英語が得意で、日本語が下手な岡村さんです」などと笑いながら彼を紹介していた。

1979年CISPRハーグ会議でロッテルダムに立ち寄って
（筆者と岡村さん）

EMC活動と若手の指導

EMCでは、妨害波を発生する側と被害を受ける側の対策が不可欠である。また、技術的な知識と法制度的な知識が必要である。その点、岡村さんと私は、これ以上望めないぐらい上手に仕事を分担していた。彼は通産省の外郭団体に所属して妨害波を発生する機器側に近く、私は郵政省の研究所に勤めて被害を受ける無線機側に近かった。また、彼は欧米、特に米国とドイツのEMC関連の法制度や規格に詳しかったし、私は研究者としてEMC問題に対応していた。従って、我が国でEMC問題が騒がれ始めた1980年代、通産省は彼を全面的に頼り、郵政省は私に様々な相談をした。勿論、CISPRや不要電波問題対策協議会を支えている郵政省は、岡村さんにも大いに頼った。毎週のように岡村さんは通産省と郵政省に顔を出していた。当然、彼は、産業界のEMC活動もリードし、EMC関係者で知らない人が居ないほど有名になった。このようにして、我々の所には、我が国のEMCに関する産官学の殆ど全ての情報が集まることになった。従って、我々は毎週のように酒を飲みながら情報を交換し合い、様々な組織のEMC活動や施策を相談した。当時は、岡村さんが最も生き生きとして活躍していた時代である。

1990年代になると、私は地方に転勤したため、CISPR国内委員会や不要協の委員会に殆ど出られなくなった。このため、岡村さんのリーダとしての役割・負担は非常に重くなったように思う。彼も自分の立場を大いに意識していたようで、様々な委員会に出来るだけ出席して意見を述べ、若い人達と行動を共にして、彼らの指導育成に努めていた。CISPRや不要協の会議は非常に多いので、彼は毎週のように若手を飲みに誘っていたと思う。余談であるが、CISPR/Frankfurt会議では、若手が混浴のBaden-Badenに行くと言い出したら、彼は楽しそうに付いて行った。いま考えると、岡村さんの体調は余り良くなかったかも知れないが、若い人達と飲み食いしているときは、何時も愉しそうであった。好々爺としての岡村さんであった。

技術への興味

岡村さんは情報収集のみならず、技術者としても素晴らしかったと思う。1980年前後、CISPRでは反射箱の導入を検討し始めたので、私は岡村さんと一緒にJMIにあった反射箱を使って、その特性測定を行った。当時、私はGHz帯の測定について未経験だったので、彼にアンテナ特性や定在波比の測定など、様々な高周波測定の基礎を教えてもらった。その後、私がサイトアッテネーションの論文を書くと、彼はいち早くそれを読んで、JMIの職員に解説したそうである。また、1990年代後半になると、EMIアンテナの校正に非常に関心を持ち、米国国立標準技術研究所（NIST）の技

JMI妨害波自動測定委員会（1988年）（左から筆者、故横島さん（電総研）、故赤尾先生（名大名誉教授）、一人おいて、石野さん（TDK）、佐藤先生（東北大名誉教授）、一人おいて、岡村さん、原田さん（JMI）、宮島さん（電波研）の各氏）

術と経験を大変信頼していた。このため、CRLのアンテナ校正結果がNISTの結果と大きく異なったとき、彼はその事を心配して私に親切に忠告してくれた。私は驚いてCRLの校正を詳細に検討し、それが正しいことを確信して、彼に報告した。そこで彼は、真冬の2月に1週間、自ら京都の野外測定場でアンテナ校正の実験を行った。その結果、CRLが正しいことが証明されたが、その報告を受けた時、彼の顔が測定中の寒さのために変形しているのに気づき大変驚いた（本当の話！）。

また、彼はセミナーで話す機会が非常に多く、OHPは何時も配布資料を拡大したものであった。そこで私が、「OHPの1/3位は新しいものを毎回作っており、出来るだけ努力している」と話したら、それから彼はOHPに色々なカットを入れ、私より先にPower Pointのslide showを用いて字が飛び出すように工夫したりしていた。それぐらい、彼は真摯で、努力家で、驚異的な馬力の持ち主であった。

CISPR SC Secretary

1980年代になると、我が国はCISPRに対して大いに貢献し、その実力は各国に認められるようになってきた。そこで、1985年にIT装置の妨害波を扱う小委員会SC-Gが設立されると、我が国はその幹事国Secretariatになることを試みた。幹事国は、担当する小委員会のChairmanを人選し、Chairmanにつぐ Secretaryの人材を用意して、小委員会の運営に責任を持つ国である。我が国はこれに立候補したが、蓑妻先生の御努力にもかかわらず、SC-Gの幹事国はドイツに決まった。その後、カナダがISM機器を扱うSC-Bの幹事国を辞退したため、CISPR上層部が検討して、その担務を日本に頼むことが決まった。1987年カリアリ会議中に、議長Mr. Jacksonが岡村さんにこれを提案し、側にいた私の了解を求めてきた。私は、蓑妻先生や岡村さんと相談し、郵政省とも電話で協議して、我が国が引き受けることをMr. Jacksonに伝えた。同時に、岡村さんがSecretaryを担当することになった。その後、岡村さんは、亡くなられるまで、責任が重くかつ多忙なSecretaryの職務を遂行された。

近年、私は、岡村さんにSecretaryを辞めて戴き、楽になって戴こうと思い、その方策を考えていた。CISPR委員会委員長の仁田先生や総務省も同じ思いであった。ちょうど良いタイミングで、昨年、放送受信機を担当するSC-EとIT装置を担当するSC-Gが合体して新たにSC-Iができる事になった。そこで、我が国はこの幹事国を引き受け、それを契機にSC-B幹事国を辞退して、岡村さんに辞めてもらうことを企てた。このことは岡村さんも納得しており、Secretaryを辞めたら、私と一緒に家族連れでスイス旅行をしようなど

と、楽しい計画をしていた。SC-Iの幹事国には、米国、イタリア、日本が立候補して熾烈な争いとなったが、その最中に、突然、岡村さんが亡くなってしまった。今年６月、CISPR/Bristol会議で投票が行われ、我が国は13票を獲得し、イタリア7票、米国4票で、圧倒的な支持を得てSC-Iの幹事国に選出された。この素晴らしい成果は、CISPRに対する我が国の貢献を各国が認めた結果であるが、20年以上にわたって我が国のCISPR関係者を指導育成してきた岡村さんの業績でもあった。この総会に岡村さんが出席できなかったのが、本当に本当に残念であった。岡村さんと一緒に美酒に酔いたかった。

好みと健康

私は、毎年２～３回、岡村さんと一緒に海外旅行をしていたから、年に１ヶ月ほど、彼と行動を共にしており、色々と彼の面白い側面を見ている。例えば、ホテルの朝食で、若いウエートレスに“Hi!　Honey!”と声をかけ、茶目っ気を発揮していた。また、学生時代にサックスか何かを吹いていたので、しばしば銀座でカラオケを歌っていた。彼の「おはこ」は英語の歌で、ラブミーテンダーやダニーボーイである。一度だけ、「小指の想い出」を歌ったので、大変驚いたことがある。また、彼と待合う場所は、多くの場合、京王プラザのロビーであった。彼は何時も「おしゃれ」でした。

1980年代、岡村さんは何時もポケットに人工甘味料を持っていたので、健康状態を伺ったら、糖尿の気が少しあると話して居られた。従って、食事の量は少なく、鰻丼を食べても、ウナギを一切れと、その下の御飯を少し食べるぐらいで、余り行儀の良い食べ方では無かった。また、ビールを少々飲むぐらいであった。このように健康に気遣っている岡村さんが、不思議なことに、飲み会の後は何時も我々を喫茶店に誘い、自らケーキを注文して食べた。最初、この酒とケーキの取り合わせに驚いた。1990年代になると、彼は若手と歓談するのが楽しいのか、何時も飲み屋に誘って、自分も日本酒を飲むようになった。また、煙草は、我々の忠告を気にして何度も禁煙しようとしたが、最後まで止められなかった。このような状況から、最近は彼が持病持ちであることを全く忘れていた。そして、私が「疲れた、疲れた」と云うと、彼は「杉浦さんは疲れたが口癖だな」と云って笑っていた。ところが、彼の方が突然、燃え尽きてしまった。

岡村さんの思いでは尽きないが、平成13年4月27日、岡村さんの葬儀で僭越ながら私が読んだ弔辞を記して筆を置きます。

岡村さんと悪友（亡くなる２ヶ月前　2001.2　作並温泉・一の坊にて、左から岡村さん、結城さん、石野さん、筆者）

【弔　辞】

岡村万春夫さん！

貴方に、最後のお別れと、御礼の言葉を申し上げます。

岡村さん！

貴方の余りにも、余りにも突然の死に接して、我々は非常に驚き、未だに、お亡くなりになられたことの実感が沸きません。今にも、貴方が褐色の角張った鞄を提げて、部屋に入ってこられるような気がします。

岡村さん！

私が貴方と親しく言葉を交わすようになったのは、二十二年前、電気機器や自動車などの電波雑音に関する国際規格を審議しているCISPR会議に参加するため、オランダのハーグに二週間滞在し、貴方と同じ部屋に泊まったのが契機だったと思います。私にとって初めての国際会議でしたから、貴方は若輩の私に色々なことを教えてくれました。特に印象深く残っているのは、その会議で私が測定結果を報告することになっていたのを議長が忘れてしまい、私の発表を飛ばしてしまった時のことです。日本がCISPR会議に参加するようになって、未だ数年しか経って居ませんでしたから、貴方は、日本が無視されたと感じ、休憩時間に議長に猛烈に抗議されました。その時の貴方の迫力と、議長の恥じ入っている姿が目に焼き付いています。その時、貴方は四十二、三才だったと思いますが、日本を代表して国際会議に出る者の責任と心構えを教えてくれました。それ以後、貴方は、我が国から多くの技術的な貢献を行うことによって、CISPRにおける我が国の立場を高めることに尽力され、我々を指導して下さいました。貴方のお陰で、今や我が国はCISPR会議で重要な位置を占めるようになりました。また、貴方は、その技術力、人柄、責任感、英語力を国際的に認められ、1988年には国際会議のSecretaryに選任され、今日まで国際的に活躍され、国際規格作りに多大の貢献をなされました。

このような国際的な活躍と共に、貴方は、国内においても、電波雑音の低減に関して産業界の意識改革、技術指導および情報提供に尽力されました。我が国の産業界の電波雑音対策は、貴方が引っ張ってきたといっても過言ではないと思います。特に電波雑音に関する我が国の規格作りでは、貴方無しでは何も出来なかったと思います。また、産業界に対して、相互承認等の問題をいち早く訴え、国際的なアカウンタビリティの重要性を何時も強調されていました。また、電気通信技術審議会や不要電波問題対策協議会、さらに通産省や各種工業会の委員会で指導的役割を果たされ、活躍されました。本当に有り難うございます。最近は、国内規格作りの主査として、また国際会議のSecretaryとして膨大な仕事をこなして居られましたが、それが貴方の健康を害していたのではないかと思うと、気が付かなかった我々は残念でなりません。御許し下さい。

岡村さん！

貴方とは、国内において多くの会議で顔を合わせ、激しいやりとりを幾度と無くやりましたが、貴方は、会議が終わると、何時も「一寸待ってよ、今日は暇なんだろう。一杯やっていこうよ」と我々若輩を誘われました。そして、我々が話すのを楽しそうにきき、時々は苦言を呈してくれました。怒られても、貴方の真面目さ、人柄のよさ、面倒見の良さを肌で感じたものです。貴方は格好良く、素敵なジェントルマンでした。

岡村さん！

貴方が亡くなられたことを、CISPRの主要メンバーに知らせましたら、お悔やみのＥメールが入ってきました。その一つを読みます。貴方がもっとも親しくしていた、Mr. Art Wallからです。

Dear Dr. Sugiura:

Thank you for informing your CISPR colleagues about the passing of Mr. Okamura. Needless to say, Hanna and I are in shock and deeply saddened by the news of his death. He was truly a great person and it was my privilege to know him. We will all miss him greatly. I will never forget all the kindness he has shown to me over the past 25 years. I also know you were his friend for many years and you will greatly miss him. My sympathy and condolences to you for your lost. We will send separate condolences to Mrs. Emiko Okamura.

May his spirit rest in peace

Your colleague and friend,
Art and Hanna Wall

岡村さん！

今度お会いするときは、どこか広々とした部屋で、ソファにゆったりと腰を掛け、心ゆくばかり穏やかに昔話をしたいものです。勿論、貴方は好きなソルティドックを飲みながら、奥様やお嬢様、また本日、ここにお集まりの皆様に囲まれて、思い出話にひたりましょう。そうです、夜の落ち着いた雰囲気の中で、テーブルのローソクの火がゆらゆらと揺らぐのを眺めながら、ピアノの生演奏をバックに、少しずつ、昔の楽しかったことを皆んなで語り合いましましょう。そして、たまには、貴方の好きな「ラブミーテンダー」を歌って聞かせて下さい。その低い穏やかな声で。

岡村万春夫さま、もうお別れです。本当にありがとう御座いました。心安らかにお休み下さい。（合掌）

岡村さんを偲んで

スタンレー電気株式会社
近田　隆愛

岡村さんがご逝去された知らせをいただいたとき、つい1ヶ月ほど前の委員会でお会いし元気なご様子に接しておりましたので、晴天の霹靂にさらされた感じで、お歳から考えてもまったく予想外のことであり容易に信じることができませんでした。

改めて岡村さんのご略歴を拝見致しますと、電波技術審議会専門委員として第３部会の作業に係わられたのは1972年とありますので、私は、そのときから電波技術審議会及び電気通信技術審議会のCISPR関係の仕事の関係で、お会いしていたことになりますが、岡村さんが、特に中立機関に所属されている立場で電波障害問題全般に広く関与されておられたことに対して、私は自動車と内燃機関分野の業界より参画しておりました関係から、審議会第３部会及びCISPR委員会又は関係団体の電波雑音問題の調査研究会などで挨拶を交わすこと程度のお付き合いで終始しておりましたので、岡村さんと親しくご交流する機会を見過ごしてしまい誠に残念に思っております。

岡村さんは、優れた人格をもたれた、もの静かな紳士そのもので、会議では控えめに対応されておりましたが、私が感銘を受けましたのは、温容をもたれた心のうちに仕事に対する情熱と一貫した公正感に基づいて行動されていたことであります。特に、CISPRへの我が国の取り組みに関しましては、常に前向きの態度で臨まれ、世界の動向を高い見地から洞察されてのご発言には、その都度感心させられ勉強になりました。また、英語にご堪能なことは有名でしたが、欧米的思考法にも抜群に優れておられ、CISPR委員会においての適切なご指導にはまったく感心致しておりました。

私のCISPR委員会の仕事に関して、岡村さんから直接ご指導いただく機会は殆ど無かった次第でありますが、忘れられないのは平成９年度にCISPR25の国内規格答申の作業を行いましたときに、原文の電流プローブ要件仕様に記載されていた数式に関し、解釈間違いであるとのご指摘をいただいたことで、岡村さんの専門知識の深さに改めて敬意を表した次第です。

岡村さんは、早くからCISPR国際会議に参加され、この面で多くの足跡を残しておられますが、私の参加は1985年からで比較的新しく、この面で岡村さんは10年先輩に当たりますので、私が初めて出席した頃には精神面で多くのご援助を受けました。私が２回目にCISPR国際会議参加の地中海サルジニア島開催のときでしたが、自動車関係での参加は故蓑妻先生と私の二人で、先生はCISPR運営委員会にも出席されるため先発されましたので、私だけの旅行でした。会議場は島の主要都市カリアリ空港から専用バスで１時間近くもかかる南端のリゾートホテルで、チェックインを済ませて指定された林の中の薄暗いコテージに心細く荷物を置いて、早々に会議事務局へ登録の手続きに出かけましたが、そのとき途中で岡村さんとお会いし、やさ

1989年CISPRコペンハーゲン会議において（左から結城（NTT）、故蓑妻先生、筆者、黒沼、杉浦、岡村の各氏）

しい笑顔で「いらっしゃい」と声をかけていただいたときは、いろいろな心配が一挙に吹き飛んでしまったことが懐かしく思い出されます。また、それ以降のCISPR国際会議におきましても、対応分野の違いで議事に関してのご指導はありませんでしたが、会議外での行動のときはいろいろとお世話になり、安心して滞在することができ心強く感謝致しておりました。写真は、1989年コペンハーゲン会議のときの会場前広場におけるスナップですが、このときの滞在中には日本食レストランに案内していただき、大盛の丼ものを持て余したことなどの思い出があります。

また、多くのCISPR会議で外国の方々と打ち合わせや懇談をされているところを拝見し、岡村さんの活動力及び懐の深さについての強い印象をもっておりました。岡村さんのような国際人の活躍の場は、これからますます増加し、重要性が増して参りますが、このような大切なときに急逝されましたことは、関係方面に大きな損失であり誠に残念なことと存じます。

心から哀悼の意を表し、岡村さんのご冥福をお祈り致します。

岡村さんとCISPR

松下電器産業株式会社
井上　正弘

1　CISPR会議にて

岡村さん（このように書くと、偉大なCISPRの巨星に対して失礼かとは思いますが、生前親しくお話させて頂いていたので、親しみの念をこめて「岡村さん」と呼ばせていただきます）と最初に出会ったのがいつだったかは記憶が定かではありませんが、強烈な印象を受けたのは1985年のCISPRシドニー会議でのことでした。その会議は私にとっては初めての国際会議への参加で、家電機器部門の小委員会（SC－F）を主任務とし、その他に、当時ISM装置（工業用・科学用・医療用装置）と情報処理装置の両方を所管していたSC－B、測定器・測定法のSC－A、またそれぞれのWG（作業班）と、2週間にわたり多くの会議に参加しました。初めての経験で国際会議のルールもわからず、ひたすら各国代表が話す聞き慣れないなまりの強い英語を聞き取ろうと必死になっていました。特にSC－Fは報告書を提出しなければならないので、いささか困惑していたところ、私の隣の席ですらすらとメモをとりながら、会議の進行状況について丁寧にご説明をいただいた記憶があります。このとき、他国の代表の長々とした英語のスピーチをほとんど同時にきれいな日本語の文章にして私に渡して下さったので、何とすごい英語力をお持ちの方だろうと驚嘆しました。このような卓越した英語力を持っておられたゆえに、岡村さんはCISPRにおける日本で唯一の国際幹事として長い間活躍されたのであろうと思います。

1986年9月　サンディエゴ会議にて
（左から結城、杉浦、岡村さん、山際の各氏と筆者）

2000年６月
サンクトペテルブルグ会議にて（左から高野、岩渕、筆者、岡崎、岡村の各氏）

1989年　コペンハーゲン会議にて（左から著者、岡村さん、杉浦氏）

また、岡村さんは細かいところにも気配りができる社交家でした。シドニーの街角でアメリカFCCのアートウォール氏が交通事故に遭われた時は、病院に駆けつけ、お見舞いだけではなく、同行されたウォール氏の奥さんを色々と支援されたと聞きました。シドニー会議では昼食を会議場外で各自で取らなければならなかったので、その時も、会議後の夕食の時も、いつも日本人のグループを引き連れてレストランを見つけ、英語の不自由な私たちのために料理の注文をして下さいました。この慣習はその後の会議でも続き、日本人のグループは岡村さんを頼りにして食事をしていた人が私を含めて少なくありません。さらに夕食後もホテルの一室でだれかが持ち込んだウィスキーを飲みながら夜遅くまで話をするのが常でしたが、そんな時は必ず岡村さんがいて、にこやかにみんなの話を聞いておられました。特に当時日本のCISPR代表団長であった故蓑妻先生のためには、現在東北大学の杉浦先生と共に日本代表団の会食の場所の手配などをされ、その時も大変な気の配りようを拝見しました。

2　CISPRにおける日本代表の役割

岡村さんはいつもCISPRにおける我が国の地位の向上や役割の拡大を真剣に考えておられました。氏の目からみると、欧米に比べて日本の認識の低さがもどかしかったのでしょう、いつも「業界の人はもっと勉強してほしい」と言っておられました。ある時岡村さんと論争になったことがあります。SC－Bが取り扱っているＩＳＭ装置には工業用･科学用･医療用の高周波利用設備の他、家庭用の電子レンジ・電磁調理器のような高周波を利用する機器が含まれます。そのため関連業界には電機工業会のみならず高周波機械工業会・溶接協会・電子情報技術産業協会（当時は電子機械工業会）・日本医療機器関係団体協議会など多くの団体があります。しかしCISPRのSC－Bに継続して代表を送っていたのは電機工業会だけでした。しかも電機工業会から派遣されている私としては、工業会の中でも家電機器である電子レンジと電磁調理器についてしか責任のある発言ができない立場にありました。その他のいわゆるISM（工業用･科学用･医療用）の高周波利用設備については門外漢で意見の出しようがありません。それに対して岡村さんは「日本代表として国際会議に出席しているからにはすべての議題に対して責任がある」と強く非難されたのです。私は「利害のある関係団体が自ら出席して意見を言うべきだ」と反論したのですが、その態度に岡村さんは失望されたのか、

それ以来、私に対してあまり要望を言われなくなりました。岡村さんの言われることもその通りでよく理解できるものの、私としても民間企業の一員であり特定の工業会のバックアップで国際会議に派遣されている以上、日本のすべての業界を代表することはできない、との立場を理解してほしいと述べたつもりだったのですが、今になって考えれば岡村さんの強い思いを受け止められなかったとの悔いが残ります。ただ、この問題は現在も続いており、SC－Bのような取り扱い範囲の広い委員会では難しい問題だと思います。

3　我が国のEMC規制のキーマン

岡村さんは国際会議のみならず、国内のあらゆるEMC問題において強い影響力をお持ちでした。電機工業会においてもかつては（20年ぐらい前は）CISPRの文書がなかなか入手できず、電機メーカーもCISPRに対して無関心に近い状況でしたが、当時からCISPRに関与されていた岡村さんを訪ねてご指導とご協力をお願いしたのがきっかけで、昨今では電機工業会からも多くの提案を行うようになり、CISPRにおいて確実に我が国の発言力が強化されています。岡村さんは、EMCの基本的な技術や考え方には非常に厳しい一方、業界の立場や実力もよく理解されていましたので、CISPR規格の国内法規への取り込みにあたっては、いつも岡村さんに業界の立場を訴え、関連する行政当局との調整をお願いしてきました。これまで各種CISPR規格の国内規格化に当っても重要な役割を果たされて来たのですが、今回、SC－Bで作成したCISPR11の国内規格答申の必要性を提唱され作業班主任として作業を開始された直後に急逝されましたことは、我が国にとって大変重要な人物を失ったわけであり、誠に残念な思いで一杯です。

残された我々にできることは岡村氏の遺志を受け継ぎ、日本としてCISPRに貢献し、国内のCISPR体制も維持向上させていくことと考えます。岡村さんは「業界はいつも規格を甘くする」とこぼしておられ、私がその張本人と目されていたのですが、業界としてもできる限りの努力はしていますので、どうかご容赦ください。ここに謹んでご冥福をお祈りします。

素晴らしく「キザ」な国際人

オプトウェーブ研究所
結城　主央巳

私がCISPRへ関係した時から岡村さんには本当に色々なことを教えていただいた。技術のことはもとより、EMCに関する各国の法律や制度に至るまで、さらには外国での休日の過ごし方から、外国の著名なCISPR委員を食事に招待して安く英会話の勉強をする方法、下着のままバスタブにつかって身体と下着を一緒に洗う方法、など挙げ出したらきりがなく、その一つ一つに色々なエピソードと思い出が残っている。杉浦行先生ほど長くお付き合いしてきたわけではないが、なぜか多くの思い出が残っている。

岡村さんはキザである。キザと言ってもいやみな感じを与えるようなキザではなく、世界の知識人から見ればおしゃれで当り前なのかも知れない。野暮な私から見るとどこをとってもやはりキザで、それが板に付いている。さりげなく胸に付けたポケットチーフ、首にまいたネッカチーフ、ブランド物と思わしきアタッシュケース、靴、上着にズボン、身につけた物全てがロマンスグレーの風体と良くマッチし、洗練された気品さえただよってくる。

スタイルのみならず言動、行動までキザの一言につきる。初めて参加したCISPRシドニー会議の時、私が議事録を担当するワーキンググループ会議で、私のとなりに座り会議模様を日本語で何ページにもわたって筆記してくれた。その時はなんて親切な方だろうと大変感激した。帰国してじきに開かれた会議のおり、私のとなりに座りメモ帳を取り出し、日本語で行われている会議模様を英語で筆記しはじめた。なんてすごい人だろうと思うのと同時になんてキザな人だろうと思わざるを得なかった。

郵政省での会議の後、虎ノ門、新橋、銀座方面の飲み屋へよく通った。ほどよく飲んだ後は必ず洒落た喫茶店でコーヒーとケーキということになる。それまでの私には無い習慣で、やはり岡村流キザな行動の一つである。ヨーロッパではあちこちにカフェがあり、老若男女を問わずごく普通にコーヒーを飲み、ケーキを食べているのを見かけるが、日本はまだそこまで至っていない。それでも国際人としての岡村さんは当然意に介さず、周りの人を誘って当り前のように喫茶店へ通う。たばこ一つをとっても外国製のたばこをいつもポケットに入れておいてそれをさりげなく吸っている。それも一日にかなりの量であり、岡村さんのポケットやアタッシュケースには何種類の外国製たばこが入っているのか想像もつかなかった。

いわゆるキザと言われる人は服装とか、しゃべり方とか、歩き方とかにこだわりを持っているが、岡村さんのこだわりは国際人として振る舞うことである。知識層としての国際人気質が身に付いたところから岡村流のキザが派生している。かっこよく見せようと意図してつくりあげたキザではない。だから素晴らしくも有り、到底私ごときが真似できるものでもない。長く付き合えば付き合うほど岡村さんの素晴らしさを見出し、そこから色々なことを教えわったわけである。

日本人らしからぬ日本人、これがCISPRで最初に世界から認められた日本代表であり、外国から推挙されて長年にわたってSC-Bの幹事を務めることができた本質だと思う。SC-Bの幹事を引受けるに当たり大変迷っていたので、「お手伝いするから」、と私自身も協力することを覚悟したが、その後助けてくれとも手伝ってくれとも一言も言わず、一人で幹事と言う大役を黙々と遂行した。まさに国際人としてのこだわりである。

ベルリン会議休日のツアー（左から菊池さん、筆者、岡村さん）

今年の２月に岡村さん、石野さん、杉浦先生達と仙台の作並温泉へ旅行した。露天風呂へつかりながら、「結城さんもここまで元気になって良かった」、と岡村さんは本当に嬉しそうに話しかけてくれた。私が５年前に心臓の大手術を受けたからであるが、生涯忘れることのできない情景となってしまった。写真は10年前のベルリン会議の思い出である。岡村さんと私がたばこを吸っている。この後すぐに私はたばこを止めたが、岡村さんは禁煙の試みを数回したものの止めるまでには至らなかった。前述したように岡村さんのこだわりには素晴らしいものがある。しかし、今思えば、たばことケーキへのこだわりだけは止めて欲しかった。

国際人としての岡村さんが残した業績は大きく、世界のCISPRの礎となってさらに大きく発展することは間違い無いが、もう少し長生きしていろいろ教えて欲しかった。

岡村さんを偲んで

㈶テレコムエンジニアリングセンター
（元・ソニー㈱）
細谷　泰

業界活動の中における岡村さんの思い出

岡村さんについて思い出すことは、CISPRをはじめとするEMCの規格化活動に対する関係業界の認識の深化や取り組み強化に御協力頂いたことです。もう何年になりますか、私が当時所属していたソニーを含む放送受信機製造事業者等の業界団体EIAJ（現JEITA）内部のEMC特別委員会では内外各国のEMC規制への対応やEMC規格化活動に取り組んでいました。私もそのEMC特別委員会の設立に関わった者の一人として、初代委員長元NHKの遠藤幸男さんの下でCISPR担当の副委員長を務め、このEMC特別委員会の中にCISPR E対応小委員会という組織を作って、工業会外部の試験機関、研究機関、放送局などから関係者の方々を客員としてお招きし、工業会内の委員と共にCISPR規格案文書を評価、検討していただき、意見をとりまとめていました。ここでEMC特別委員会設立以前の旧組織時代からの客員のお名前をあげますと、当時MKK（現TELEC）の宮島さん、当時JMI（現JQA）の岡村さん、当時CRLの杉浦先生、当時NHKの黒沼さん、篠塚さん（CRL）、山中さん（CRL）などがその時代、その時代におられました。これら客員の方々には常に客観的で有益な御意見を頂いていましたので、その小委員会でまとめた意見は、既に我が国のCISPR SC-E関係者の回答意見としての完成度に近いものだったといえます。もちろんこの小委員会がまとめた意見が工業会の意見となるためにはEMC親委員会の承認が必要でしたし、関心のあるすべての委員が参加できる拡大委員会を時折開催する中でCISPR関係の説明を行うなど、工業会参加各社の理解と援助を得る努力も必要でした。

岡村さんは、こういう大人数の説明会にもよく参加していただいたものです。岡村さんが気軽にフロアーの後ろの方の席をとって静かに説明をお聞きになっていた姿からは、お人柄の気取らない面が偲ばれます。

しかし、このような説明会において一部の委員から規格案の内容が厳し過ぎるといった意見が出されますと、委員長や私などの説明に加えて、岡村さんは障害事例や国際会議の雰囲気などの紹介を交えながら規格化の必要性を述べられたり、我が国がEMC国際規格化において孤立することはけっして我が国工業界の利益にはならないとの考えを熱心に述べて啓蒙をはかるなどしていただき、誠にありがたいことでした。

岡村さんは、工業会外部の委員会など規格や規制の改正を検討している場においては、「本当にこの案で工業会各社は困らないの？」などと声を掛けて下さったり、実施時期の設定などで業界への配慮も示されるなど、そのバランス感覚といったようなものに感銘を受けたものです。

CISPR活動について

当時は電気通信技術審議会第２分科会においてCISPR SC-BおよびSC-Eの規格案およびそれらへの対処案の評価、検討が行われていました。私が関係していたSC-Eに関していうなら、分科会に対しては模範解答（？）のような審議表を用意することができ、あまり苦労らしい苦労をすることがなかったような気がします。これというのも上で述べたように岡村さんをはじめ関係者の皆様から前もってご意見を頂くことができたからで、今でも当時を振り返りますとすべての関

係者の方々に対する感謝の念がまた新たになります。

CISPR国際会議への参加も岡村さんとはイタリアのサルディニア島で開催されたカリアリ会議から横須賀会議までの10年間ほど御一緒させていただきました。SC-Eのメンバーでもあった岡村さんは当時既にSC-Bの方で御活躍だったため、一つの委員会に同席する機会がなかったのは残念でした。しかしSC-EのChairmanであったProf. Nanoなどとの食事の席での交渉では、たどたどしい英語の私を代弁してくださるなど随分とお世話になりました。

語学についていうなら、私の英語は改善の可能性なしとして岡村さんから見放されていたようでした。ということで外国語について私を刺激しようとされたのか、よくからかわれました。たとえばベルリン会議の際には街の喫茶店に入ると「細谷さん、ドイツ語でコーヒーを注文して見なさいよねっ、簡単ですよアインタッセン　カフェー　ピッテ（正確には今でも何といわれたか分からないのですが)といってごらんなさいっ」という調子でやられました。でもあの時正直にそのとおりにしていれば今頃はドイツ語がペラペラになっていたかもしれないといくぶん本気で考えたりしています。また、ラジオ講座で覚えた挨拶だけのロシア語を当時ソ連からの委員相手に試していたのを聞かれたらしく「細谷さんは英語はダメでもロシア人とロシア語で話せるのだから……」と何回もいわれ、それはコタエたものでした。それからしばらくは英語学校に熱心にかよったものです。

また、国際会議現地では、その日の委員会が終わってから近くのレストランで参加者が一緒に食事をする機会がありますが、そのような折に岡村さんから「どこの国の食事も苦にならない細谷さんは動物的適応能力があってうらやましい」などといつも変わらない私の食欲をほめられたか、けなされたか分からないようなことをいわれたものです。今となってはこれらもなつかしい思い出の一つとなりました。

以上とりとめもなく岡村さんの思い出を述べましたが、思わぬ記憶違いがありましたら失礼をお詫びいたします。おわりとなりましたが、岡村さんの御冥福を心よりお祈りする次第です。

1987年６月カリアリ会議にて（左から西村氏、杉浦氏、筆者と岡村さん）

岡村さんの思い出

情報処理装置等電波障害自主規制協議会
(VCCI)
長沢　晴美

岡村さんは本当に急に逝ってしまわれました。岡村さんが亡くなられた当日も、私どもはVCCIの認定委員会を開いており、出席の返事を頂いているのにおかしいな、と思いながら会議を終え、その後、急逝の連絡を受け呆然としたことを思い出します。

岡村さんとお付合いをするようになったのは、VCCIが設立された1985年からで、以来、VCCIの委員会やCISPR委員会その他でお会いする機会が増えてきました。

VCCIが設立された1985年当時はまだEMCなどと言う用語も一般的でなく、電波障害対策は一部の輸出品に適用する以外には、ユーザサイトで現実に妨害が起きたときに個別に対応したり、開発時の測定も容易ではなかったので、エンドユーザに使われ妨害を起こしやすい端末装置では、経験に基づき自前の測定器で対策をしているような時代でした。

このような時代に「業界の自主規制」でVCCI活動を立ち上げようというのですから、苦労がありましたし、それ以前の問題として、「電気通信技術審議会答申」に盛り込まれた「緩和措置」については、JEIDAなど工業会の委員会を指導していただくなかで「業界の実情」を理解された上で、国際標準に如何に早く整合させるかを熟慮された岡村さんのご尽力が大きかったと思います。

実際にVCCI活動を始めてみると、当初の２年間はCISPR限度値＋10dB緩和（第１段階）、次の２年間は＋４dB緩和（第２段階）、その後５年目からCISPR限度値そのものを適用（第３段階）するというスキームはそれなりに機能したのですが、第２段階から第３段階に移行するには、装置の再設計が必要なほどの大きなギャップがあることが判ってきました。最初の２段階は、新規に開発するものから適用するのですが、最終段階は既開発品もすべて適用することになっていて、特に大形コンピュータやその周辺装置は当時の技術進歩のスピードからして未だ製品寿命の半ばというものが多く、これらに第３段階を適用するには開発費に数十億円も必要な製品がごろごろとでてきました。早速、岡村さんにご相談しました。工業会は「やる」と言ったではないか、「電通技審答申」には改定という手続きは無いのだ、などと叱られましたが、深く検討すればするほどこれは大変なことだという現実が見えてくるのです。既開発品は増設需要が主ですからフィールドにむやみやたらと増えてゆく訳ではなく、現実に妨害を起こしているわけでは無いので、生産量を把握しつつ監視を続ける「継続製造制度」を考え、岡村さんに見て頂いたところ、「誰もよしとは言えない。自主規制なのだから自分で決めなさい。ただし、自主規制は相手が納得しているという前提がある、これを絶対守らなくてはいけない」と申し渡されたのです。

当時は「決めてもらう」ことに慣れていた我々でしたが、「納得して貰う」ため、夏休み返上、運営委員会メンバー総出で会員調査を行い、どうして適用がむずかしいのか、どのような製品をどのくらい造るのか、新規開発の見通し、など膨大な資料を纏め、これなら消費者に迷惑を掛けることなく、機種の変更という出費を強いることもなく、メーカも次機種の開発に専念でき、全体の利益になると自信を持つことができました。そこで「自主規制を見守っている」立場の通商産業省、郵政省に出向きました。案の定、どうして業界は決めたとおりやらないのか、から話はスタートしましたが、何度か伺いご説明しているうち、最後に「業界がそこまで努力した結果として、自分の責任でやる」というのなら「良いとは言えないが、結果を見守るこ

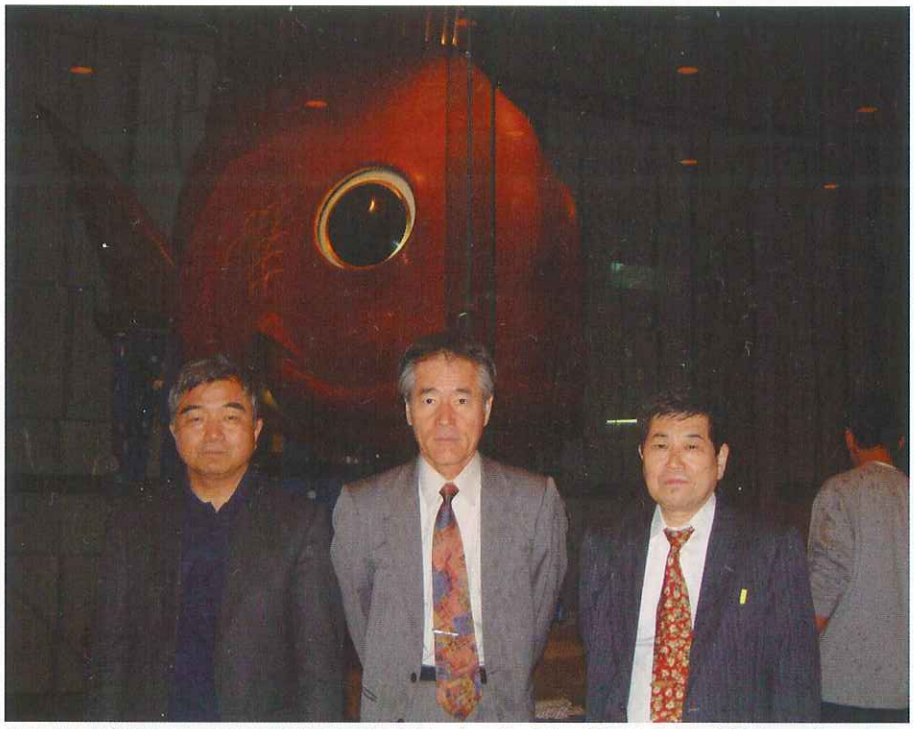
とにする」との言葉を伺ったときは、正直に言って課長の顔が仏様に見えました。

その後、この「継続製造制度」は十分に機能し、ユーザに製品廃止に伴う不利益が及ぶこともなく、電波障害が溢れることもなく、予想通りに推移して既に役目を終えました。ここで学んだことは、「相手がある」こと、つまり自分の都合だけを主張しても駄目ということをはじめ、「自分が責任を持つ」と決心したことは万難を排して突き進めば、道は開ける、ということでした。岡村さんに「自分で決めるように」と言われた時には、正直突き放されて困ったと思いました。しかし、当時の業界の「決めてくれたらやる、だけど、なるべく楽にして欲しい」という自主性の無い態度に岡村さんは辟易されていたのかも知れません。

岡村さんに教えて頂いた「相手がある」と言うことは、その後も、「VCCIの活動の原点」として常に忘れずに心掛けています。最近でこそ、規制緩和が叫ばれ、EMCの世界でも１－１－SDOCというスキームが検討されていますが、いずれも製造者が自己責任をまっとうすることが前提となります。この「原点」を貫いてきた結果、最近このような局面に立つことが増えてくるにつけ、何の違和感も無く受け入れられるのは、岡村さんの「自分で決めよ」という教えのお陰と感謝しています。

岡村さんには、その後も技術専門委員会、企画調整委員会、認定委員会の委員としてずっとお世話になり、まさにVCCIの恩人です。悔やまれるのは、岡村さんと海外にご一緒する機会を持てずに終わってしまったことです。岡村さんのお得意の「思いでのサンフランシスコ」を現地で聞くことができなくなってしまったのが残念でなりません。

岡村さん、これからも是非VCCIを見守っていて下さい。



岡村さんが参加していたVCCI認定委員会のメンバー（一部）。唐津にて左から筆者、市野、長岡の両氏

CISPR国際人 岡村万春夫氏を悼む

CISPR国内委員会前委員長
東北文化学園大学
高　木　相

全くおもいがけないことでした。前日（13年４月24日）はVCCIの認定委員会があり、岡村さんも出席されるはずでしたがとうとう見えませんでした。当日も電話があったということでしたので、なにか急な用事が出来たのだろうと軽い気持ちで委員会をやりました。いつものように夕食をすませて夜仙台へ帰って来ました。次の日は水曜日で、大学で教授会などいろいろ仕事があり忙しい日でした。そこへ杉浦先生からの知らせが飛び込んできました。全く信じられないことでした。昨日岡村さんは確かに職場に居たはずなのにと耳を疑い、納得するまでに時間を要した次第でした。

岡村さんはCISPRのSC－Bのセクレタリとして国際的にかけがえのない方でした。今までわが国がCISPRの舞台で果たしてきた足跡と成果に岡村さんが果たされた役割はまことに大きいものがあります。私がはじめて岡村さんとご一緒したのは1988年CISPR国際会議がカンピナス（ブラジル）で開催されたときでした。この年から前委員長の蓑妻二三雄先生に替わって私が国内委員会の委員長を仰せつかりましたので、CISPRに無案内な私は勉強のため皆さんと同道しました。確か成田から現地までご一緒したように記憶しています。その前にも何度かお会いしていますが、はじめてお会いしたのは1978年ロッテルダム（オランダ）でした。この年ここでCISPRとEMC国際シンポジュームが開催されました。

カンピナス以後毎年CISPR国際会議には参加しました。はじめのころ私が気になったことは、日本からの出席者はいつも約１割に達していましたが、CISPRへのわが国の貢献は多くなかったことです。そのころすでにわが国は世界第二の経済大国で世界から注目されている現状を考えると大変さびしい思いがしました。しかし、わが国がSC-Bの幹事国になり、フローリック氏（オランダ）を委員長に頂き、岡村さんがセクレタリとなることが決定してから、わが国のCISPR対応はアクティブになり大変心強い思いをしたことを思い出します。以後SC-Bはもちろん、わが国のCISPRに向けての貢献度は急速に高まり、いまやわが国を除いてCISPRは成り立たないほど大きい影響力を持つに至りました。そして今般SC-I（マルチメディア）が新設されることになり、わが国が幹事国となったと伺いました。このことに関しても、岡村さんの働きが陰に陽に大きく影響したことは確かです。私個人にとってもこの朗報は、かってカンピナスの空で仰いだなんとも寂しいやるせなさを払拭するものでした。

岡村さんとのここ10年間の付き合いは、委員会で、会食の場で、また２次会で、考えてみるとほぼ毎月でした。ワインを好み、英語の歌を歌う岡村さんの姿が脳裏に残ります。

早世でした。まことに惜しい人を失いました。心から岡村万春夫さんのご冥福をお祈りいたします。

1995年CISPRダーバン会議において（左から加藤さん（郵政省）、筆者の妻、筆者、岡村さん）

岡村さんから教わったこと

元・TDK株式会社
石　野　　健

「どんなに優れた吸収体でも実績が少ない。信頼性に自信をもてない。作るのは私であり、その責任は私にある。今計画している電波暗室は貴方には分からないかもしれないが信頼性が命である……」無表情に、取り付く暇もなく…。新たに開発されたフェライト多層型電波吸収体の技術説明にお伺いした時の岡村さんの一言。

他人に対し人一倍気を配り、心やさしい岡村さん、一度仕事に向かった時の厳しい姿勢、これが私と岡村さんとの出会いでもある。早いものでもう20余年も昔のこと……。

以来、公私に亘り田舎物の私を育て頂いた次第です。不要協で10年間、妨害波委員会作業班を勤めさせて頂いたのも、岡村さんの絶えざるご指導あってのことです。

よく岡村さんから，「石野さんこれからは世界を相手に仕事しなければ」と言われたものです。海外調査団、国際会議等ことあるごとに海外活動の手ほどきをご指導いただいた次第です。

EMCに関し、日本と世界との橋渡しにご努力されておられたお姿の一こま、ここに思い出の旅をご紹介させていただきます。JMIイミュニティ測定委員会海外調査の旅から。(1989・11・30)「よく学び，よく遊び」まさにそのお手本を実行されていた岡村さんでした。

安全信頼性第一、ドイツLH・出発予定午後1時、既に午後6時いまだ出発のサインなし、ただ一人何も言わずじっと我慢する岡村氏(右)、左の方と対照的！

翌日早朝到着したのはベルギー、朝食もそこそこ、直ちにフランクフルトへ。

フランクフルト空港有料トイレでの着替えももどかしく、約束の時間どおり午前9時にはVDEへ、飛行機のトラブル一切口にせず約束守ることの大切さ教わる。(左から杉浦氏、岡村さん、2人おいて徳田氏、清水先生)

どうにか仕事無事終えチューリッヒへ、汽車の旅、コーラ割りブランデーで乾杯、このときの岡村さんのお顔、普段の心やさしいお姿に……

新たにイミュニティ測定用として開発されたGTEMセルの調査にABB社へ、巨大なTEMセルにびっくり。

岡村さんからいただいた数々のご指導

国立教育政策研究所
清水　康敬

1　最初の出会い

岡村万春夫さんに最初にお会いしたのは、私が企業から東京工業大学の助手として戻った少し後ぐらい（昭和47～48年？）と思います。ある委員会メンバーと一緒に㈶日本機械金属検査協会（JMI）に見学に行った時のことでした。その時、岡村課長は、「電波暗室は米国製の方がよい。」と言われました。当時私は、電波暗室用の電波吸収体の設計をしていましたので、「電波吸収体は、国産の方が厚さが薄いのに、輸入品の方がよいと言うこの人はどういう人か」と思いました。しかし、今考えてみると、世界的な国際標準測定法の観点からのご説明であったような気がします。
この時、私は見学グループの一員に過ぎませんでしたので、当然岡村さんは、私のことをご存じありませんでしたし、記憶もされておりませんでした。

2　委員会でのご指導

岡村さんから本格的なご指導を受けるようになりましたのは、平成元年からスタートしたJMIの委員会からです。JMIでは、通産省の委託事業として「情報処理装置に対する適正なイミュニティの試験方法についての調査研究委員会」を設けましたが、どういうわけか、私に委員長をと依頼されました。当時、私はEMC関連の研究といっても、電波吸収体や電波暗室の開発を行っており、イミュニティについては言葉の定義くらいしか知りませんでした。そのため、委員長としては全く適任でありませんでした。しかし、岡村さんがいつも事前に丁寧に説明して下さいましたので、お陰で何とか委員会を進めることができました。

この委員会は、その後も通産省から委託を受け、JMIの名称が㈶日本品質保証機構と名称変更された平成７年3月まで続けられました。このように、私は合計６年間という長い間、イミュニティに関する委員会で、岡村さんから標準の測定法について多くの指導を受けました。今振り返ってみますと、非常に忍耐強い岡村さんに感謝している次第です。また、この委員会に参加させていただいたお陰で、EMC関係の多くの方々とおつき合いできることになり、その後の私の人生を豊かにしていただくことができました。

その後、この委員会における経験があるという理由からか分かりませんが、郵政省電気通信審議会CISPR委員会の第４分科会の主任を、平成６年から仰せつかってしまいました。ところが、国際標準に関する内容が全く理解できませんでしたので、この分科会の司会は大変でした。例えば、２dBの規制緩和に関する討議の時に、その経緯について質問をしましたら「○年の会議でこうなり、△年の会議では◎の理由からこうなった」という説明が20～30分もおこなわれました。しかも、資料を見ずに、蕩々とご説明になられる訳です。私は、驚嘆しました。また、出席されている委員の方々は皆よく理解されても、私はなかなか記憶することができませんでした。そして、EMCの国際標準を議論するためには、国際標準化会議に出席するなど、長年の経験が必要であることを身にしみて感じました。そのため、自分自身の経験の不足を実感し、早い時期に主査を辞退させていただくことにしました。

3　海外出張にご一緒

通産省委託委員会では、海外調査がよく行われました。その海外調査のために、平成元年にドイツとスイ

スに6日間、平成2年にはカナダへ5日間、平成3年にはオランダへ7日間の海外出張を、岡村さんとご一緒にさせていただきました。また、平成元年には、3日間の台湾出張もご一緒に行かせていただきました。合計4回になりますが、いつも杉浦先生（当時、通信総研）と石野さん（当時TDK）がご一緒でした。また、徳田先生（当時NTT）もご一緒のことがありました。

海外出張の際には、岡村さんはいつも身軽な感じでした。いつも私の荷物の3分の1くらいしかありませんでした。時には、背広をいれる鞄一つの時もありました。そして、いつも冷静で、私たちが度を過ごすような行動をしますと、諌めていただいたことを思い出します。私は、海外に慣れていませんでしたので、岡村さんや杉浦先生に連れて行っていただいただけという感じでした。訪問先での特段の任務もなく、非常に快適な海外出張を何度もさせていただきました。

成田で予定のルフトハンザ航空の飛行機が故障となり、急遽サベナ航空の飛行機でブリュッセルまで行き、そこからフランクフルトへ乗り継いで、空港で着替えて訪問先に行ったこともありましたが、いろいろ楽しい思い出となっております。

台湾では、訪問先で講演をすることになっていましたが、通訳をお願いしているとのことから安心していましたら、英語から中国語への通訳であることが分かり、私は着いてからも大変でした。しかし、岡村さんは全く準備している様子もなく、その場でお考えになりながら英語での講演をされました。このときほど、英語力の必要性を感じたことはありません。

4　著書を一緒に執筆

岡村さんとは、本の執筆にもご一緒させていただきました。第1番目は、「電磁波の吸収と遮蔽」（日経技術図書1988年）です。ここでは、「第VII編、電磁妨害波の規格」を担当執筆され、規格の概要、国際機関の対応、許容値の決め方、各機器設備に関する規格について、23ページ執筆されました。

第2は、「電磁妨害波の基本と対策」（電子情報通信学会1995年）です。この中では、第8章の電磁妨害波の規格と測定法を担当され、18ページ書かれました。さらに、「最新・電磁波の遮蔽と吸収」（日経技術図書1999年）では、「第VII編、電磁妨害波の規格」の最新情報について30ページ書かれました。

筆者と岡村さん

このように、岡村さんのご専門である電磁妨害波の規格について、その時代の最先端の状況を執筆され、我が国のEMCの着実な発展に貢献されました。これらの本で多くの方々が電磁妨害波の規格と測定法を学ばれたことと思います。

5　おわりに

以上、岡村さんとの出会いから、ご指導いただいた数々を、思い出すままに書いてみました。これを書きながら何度も感じたことは、岡村さんはいつも物静かで、しかも仕事を着実に進められたということです。私は、すぐに物事に高揚してしまう悪い癖がありますが、岡村さんの行動を思い出しながら、自制していきたいと考えています。

長い間のご指導に感謝しております。

総務省と経済産業省の両方でご活躍された岡村さん

武蔵工業大学
徳田　正満

プロローグ

岡村さんの突然の訃報に接し、本当に驚きました。CISPR／Ｉの幹事国として日本が立候補し、これからというときでしたので岡村さんも大変気にしていたのではないかと思います。幸い、岡村さんを初め日本のエキスパートのご活躍が実績となり、無事に日本が幹事国になりまして、関係者の皆様が胸をなで下ろしたのではないかと思います。これも、岡村さんのご加護の賜と確信しております。

TC77国内委員会とEMC規格のJIS化

岡村さんは、経済産業省の財団法人である日本品質保証機構の職員でありながら、総務省の管轄であるCISPRでご活躍されたという極めて特異な経歴をお持ちでした。日本の社会では、省庁をまたがって活動すると、色々なご苦労が伴います。私も、CISPR委員会のＦグループ主任であるばかりでなく、経済産業省が相当コミットしているTC77国内委員会の委員長も務めておりますので、岡村さんには、色々な面でご指導を頂きました。また、私が平成５年にSC77B国内委員会の委員長になりましたが、その時に岡村さんに幹事をお願いし、ご快諾を頂きました。その当時は、CISPRとTC77の協調が国際的に叫ばれておりましたが、国内では総務省と経済産業省に分かれておりましたので、相互により良好な関係を構築する必要があったために岡村さんにお願いしました。さらに、経済産業省がEMC規格をJIS化するために、日本工業標準調査会の中に電気・電子総合企画専門委員会を組織し、EMC分科会を発足させましたが、その委員にも岡村さんが選ばれました。このように、私の関連した分野では、岡村さんに多大のご尽力を頂き、多方面のご指導を頂きました。もちろん、上記以外の経済産業省関連委員会にも、岡村さんは多数関係しておりますので、総務省と経済産業省の架け橋として、多大のご貢献をなされております。従って、岡村さんの後をどのようにカバーするかが、国内のEMCの今後にとって極めて重要な課題です。

イミュニティ試験法関係委員会

岡村さんとは、CISPR会議で毎年海外にご一緒させていただきました。皆様も同じ感想をお持ちと思いますが、岡村さんがCISPR会議での発言内容を英語で素早くメモされるのを見て、本当に驚きました。岡村さんが言うには、日本語に直していると時間が間に合わないとのことです。CISPR会議に関しては、これ以外にも色々ご指導を頂き、また、様々なエピソードがありますが、執筆予定者にCISPR会議の出席者が多数いますので、別な話題を提供します。日本品質保証機構では、経済産業省の援助により、イミュニティ試験法の検討をしておりました。その関連で海外に何度か調査に行きました。写真として提供したのは、カナダのオタワ大学のCostashe教授を訪問したときのものです。清水先生を団長にして、岡村さん、杉浦さん、石野さんと私の５名で行きました。写真の右端にいるのがCostashe教授で、その左が岡村さんです。今から10年以上も前ですので、皆さんが若々しく写っております。岡村さんの写真は何枚もありますが、岡村さんは奥ゆかしくて、写真の中央にいるものが少なく、ようやく見つけました。清水先生を団長とした調査団では、色々なエピソードがありますが、ドイツのフランクフ

ルト空港でのことが今でも鮮明に思い出されます。今回のニューヨーク貿易センタービルにおける爆破のように、その当時も飛行機のハイジャックが問題になっておりました。飛行機に預けた荷物が爆発して墜落し、預けた人は途中でおりて難を逃れたという事故のために、フランクフルト空港では預けた荷物を一旦滑走路に出して、本人が確認した荷物だけを飛行機に積み込むという方法を採用しておりました。滑走路に並べられた荷物を空港の待合室から見ると、私の荷物の周りが太陽の光に反射してきらきら輝いて見えるのです。一瞬不安がよぎりました。もしかしたら、モーゼルで購入したアイスワインが割れてバックから流れ出しているのではないかと思いました。滑走路に降りて、自分の荷物を確かめると、不安は的中しておりました。実を申しますと、ホテルで荷物を詰めるときに、岡村さんに「ワインをバックに詰めると、飛行機での運搬時に割れてしまう可能性があるので、手で持っていった方が無難ですよ」と指摘を受けておりました。その時私は「下着で完全にガードするので大丈夫ですよ」と言って、ワインをバックに詰めてしまったのです。

1990年12月にカナダのオタワ大学にて（前列中央が清水先生、後列は右からCostashe教授、岡村さん、石野さん、杉浦さん、筆者）

滑走路で、割れたアイスワインを見て、岡村さんが私に「年上の言うことは聞いた方がいいですよ」と優しく言われたことが、今でも鮮明に思い出されます。私はどちらかというとゴーイングマイウエイで行動するタイプでしたが、この事件後は、岡村さんの言葉を思い出して、自重するように努力しております。

上記以外にも、岡村さんには数々のご指導を頂きましたので、それらに深く感謝するとともに、岡村さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

岡村さんの想い出

NTTアドバンステクノロジ㈱
雨宮　不二雄

私の駆け出しのころ

私が岡村さんに初めてお目にかかったのは、CISPRコペンハーゲン会議（1989年6月）のSC-G対処方針を審議した、電気通信技術審議会CISPR委員会第１分科会（当時）の場でした。NTT研究所内でEMC研究グループに異動して１年と数ヶ月、当時のNTT委員であった井手口氏（現九州東海大学教授）のお供をして、初めてオブザーバ出席した時のことです。以下は、第１分科会が終わり、同氏に伴われて岡村さんにご挨拶した際の、三人の会話の再現です。

井手口氏：自分はCCITT（現ITU-T）の専担になり、CISPR/SC-Gについては雨宮が自分の後を担当しますので、よろしくお願いします。

私：雨宮です。どうぞよろしくお願いします。

岡村さん：（タバコに火をつけながら、井手口氏に向かって）おい、大丈夫なんだろうな。

井手口氏：大丈夫です。

岡村さん：（一寸の間の後、私に向かって）よーし分かった。うんとしごいてやるから覚悟

しとけよ。

私：よろしくお願いします。（お辞儀……）

という情景が、今でも鮮明に脳裏に焼き付いています。

この時以来、ことCISPRに関しては、国内・国外を問わずありとあらゆる場で、私は岡村さんから「しごき」を受けることになりました。会議のしきたりや進め方、コーヒーブレークの重要性等も含めて、非常に多くのことについてご指導・ご鞭撻を頂きました。私がSC-Gおよびその作業班会議への対応をなんとか今日まで続けられてきましたのは、岡村さんの「しごき」の賜物と深く感謝している次第です。

一緒に参加して下さった数々のSC-G作業班会議

情報技術装置は日進月歩が激しい分野であるため、SC-Gは年に１度開催されるCISPR合同会議の合間を縫って、１～２回、場合によっては臨時のSC-G会議も併設し、作業班会議を開催してきました。東芝（当時）の伊藤氏と雨宮の２人で、暫くの間SC-Gのエキスパートを担当していましたが、1990年頃から審議する議題が非常に多くなり、対応が困難になりつつありました。そして、その際に、伊藤氏が実質兼務していたG/WG1のエキスパートに、専担者を配置すべく労をとって下さったのが岡村さんでした。それだけではなく、その後、上述した合同会議の中間に開催された作業班会合にも、都合がつく限り参加して下さるようになり、以来、私が岡村さんの「しごき」を受ける機会もほぼ倍増するようになったのです。

岡村さんと筆者

年１度のCISPR合同会議以外に、1993年のアイントホーヘン（オランダ）会議を皮切りとして、サンフランシスコ、ウッデンブリッジ（アイルランド）、メス（フランス）各１回、米国キングストン３回と合計７回の作業班会合にご参加頂きましたが、ここで、岡村さんから頂戴した「しごき」にまつわるエピソードを一つ二つですがご紹介しましょう。

岡村さんは、これらの作業班会合に出席されても、審議議題について直接発言されることは殆どございませんでした。私たちエキスパートの横に座り、議論のポイントをメモ（何と英語のメモです）しながら、時々、「今議論はこういう流れになっているが、把握できているか？　日本のエキスパートとしてどう対応するのか考えはまとまっているか？」と呟いてくれました。これは大変貴重なアドバイスで、自分の認識とおおよそ合致している時は「ありがとうございます。」と一言お礼を述べ、内心ホッとしたものでした。逆に「えっ！そうですか?!」という時は（実は度々あったのですが）、会議中であるにも拘らず、手短に自分の認識をお伝えして誤りを直して頂いたものです。私は、不覚にも最初これが岡村流「しごき」だとは気付きませんでした。岡村さんは、私が初めてお会いした時にかけて下さったお言葉通り、私を「しごき」続けてくれたのです。これが岡村流「しごき」だと気付いてからは、できるだけご迷惑をかけないよう自分自身努力したつもりでした。しかしながら、心の奥底では、横に岡村さんが座っていらっしゃるという安心感にどっぷり浸かり、岡村さんの呟きとも言える「しごき」を少なからず期待していたのではないかと自省の念が絶えません。

いつの作業班会議の時であったか忘れてしまいまし

たが、一向に上達しない私の英語について、「俺の手には負えんよ。1～2年どこかへ語学留学でもしなければだめだな。それも時すでに遅しか。」と言って、滅多に声を出して笑うことのなかった岡村さんが、声を出して笑われたことがありました。私は、岡村さんに「時すでに遅しであるのは間違いありません。」と申し上げ、ここぞとばかりに「今からでも英語が上達する方法があるのでしょうか。」と質問しました。この時、岡村さんは、「お前なー、気持ちは判るけどそんな上手い方法がある訳ないだろう。（一寸の間）まーいいか。よーし、お前に合いそうな方法を教えてやる。」と言って次のような方法を伝授して下さったのです。

①中学校（2年、3年）の英語の教科書をそらんじるまで声を出して読め。

②英検3級～2級程度の物語のカセットテープを暗記するまで聞け。

いやはや大変なことになってしまったのですが、未だにこの①も②も達成するに至っておらず、今となっては、これらは私に対する岡村さんからの「しごき」の遺言となってしまいました。

最後になりますが、写真は、CISPR/SC-G作業班会議（1996年4月、米国・キングストン）の後、キングストンからニューヨーク州の州都であるオールバニ行きのバスを待っている間に撮ってもらったものです。この時の会議では、通信ポートの許容値と測定法でホットな議論があり、岡村さんから初めて「よく頑張ったな。」と労いの言葉を頂きました。キングストンでは2001年1月下旬に、3度目のSC-G作業班会議が開催されていますが、この時もご参加下さり、SC-G議長であったCalcavecchio氏の自宅でのパーティで、各国メンバと談笑されていたのが印象に残っています。

私の駆け出しのころから、岡村さんは、口では「しごいてやる」と言いながら、実は暖かく見守って下さり、何から何まで懇切丁寧に教えて下さいました。私が今日あるのも全く以ってして岡村さんのお陰と心より感謝する次第です。岡村さん、本当に、本当にありがとうございました。

JQA岡村さんを偲んで

㈳関西電子工業振興センター（KEC）
長岡　文俊

KECが生駒へサイトを作ったのは昭和44年のころ、当時は不要輻射電波測定所としてテレビとFMラジオの米国規制対応から関西電子企業のために生まれ、既にJQAさんの前身（当時日機検＝JMIと言われていた）に電波課長の岡村さんが中央（東京）でこの業界のリード役に脚光があった。生駒サイト開始に当り僕はその要員としてKECへ採用され、先輩の右馬野さん（故人）は上層部指示で当時のJMIさんへ研修に一週間ほどお世話になった時の指導に当たられたのが岡村さんであったことを聞かされていた。

僕は昭和50年頃にKECへ電磁波障害分科会を作り事務局であったため当時としては関西企業への国際規格情報や動向に疎いためIEC/CISPR規格を広げる狙いから特に出会いはそのころからのお付き合いのひろがりであった。それまでは東京での岡村さんによるFCC説明会レクチャー終了後に挨拶したときの印象は猪口才な……軽くあしらわれた記憶が残っています。

その後、KECエベントや賀詞交歓会などでの情報交流は幅広く大変お世話になりました。丁度、ヨーロッパのイミュニティ規制等も重なり、慌しかった傾向と、当然に杉浦さん（当時の郵政省CRL）のCISPR会議活躍と同様に岡村さんの存在もあった。それから情報装置（ITE）の自主規制VCCIが昭和60年頃に発足され

技術専門委員会が出来た時から会議は一緒でした。このころの岡村さんは会議での意見は以前とは変わった中立的（役所と企業の中間的立場）と円やかさを持つ人であったんだと、或いは前からそうだったのかも知れないのですが……内心感じた次第です。これは僕の勝手ごととお許し願います。色々な会議に出席するなかで僕もタバコを吸う方なのですが岡村さんはヘビースモーカーだったのです。少しお会いしていない間、お体が小さくなったように感じたので尋ねると糖尿病があると申され食事も品質の良いもの肉類は少々に奥さんと共ども気遣いされて居る様子を話してくれた時はお身体を大事に労わって下さるよう申し上げたのは1年前のころでした。

いつも親しげに杉浦さん（今は東北大教授）、と岡村さんコンビは一躍の中、VCCI3機関（JQA、TELEC、KEC）纏めでもお世話になり、これからも業界のために発揮頂けるものと……そのようなお顔と持ち前のキャラクターへお会い出来ない急な去り方に残念で仕方がありません……JQAさんをはじめ業界尽力にも穴の空いたかのような失った想いに寄せて御冥福をお祈り致します。

合掌

永遠の宿題を頂く

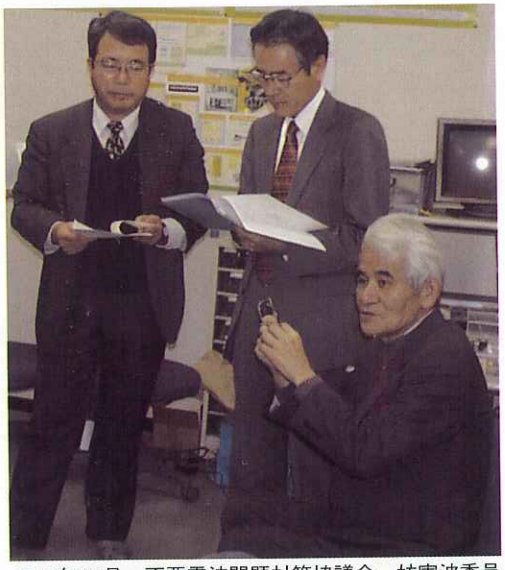
㈶テレコムエンジニアリングセンター
市野　芳明

私が岡村さんを知ったのは、1995年に当時のMKK（現テレコムエンジニアリングセンター）に入り、各種会議に出席するようになってからでした。当方人手の事もあり、その頃からCISPR国内委員会の殆どの分科会や不要協等の会議に名を連ねて出席したところ、やはり殆どの会議に岡村さんが出席されていました。そしていつも侃々諤々と意見を戦わしておられたこと、そのご意見には豊富なご経験の裏打ちがなされていることがとても印象的でした。

CISPR25（車載受信機保護のための妨害波の推奨限度値及び測定法）の国内規格化を担当させられたとき、未熟な私が回路網の整合の疑問点についての対応に困ったとき、杉浦先生とともに、岡村さんから適切なご指摘を頂いた事も忘れられません。

不要協では、妨害波委員会の作業班においていつも検討課題を提起されていました。毎年の作業進展の原動力は、そこにあった訳です。最近では、今年（平成13年）不確かさの報告書まとめのとき、正規分布の事で何人かで結構白熱した議論がありました。解散した数日後、自分が間違っていたとのメールが関係者宛にあったときは、これが岡村さんなのだと驚かされました。

会議では、隣り合わせて着席させて頂いたことが結構多かったように思います。何故覚えているかというと、いつも岡村さんの煙草の煙が不思議と私の方にな



2000年12月　不要電波問題対策協議会　妨害波委員会実証実験において（右から岡村さん、筆者、篠塚さん）

びいてきたからです。

２年ほど前のある会議の後、岡村さんが私に一枚のCDを何気なしにプレゼントしてくれました。それは、英会話練習用のものでした。私が英会話は全くの不得手であることをご存じの岡村さんが私に下さった“永遠の宿題”だったのでした。

今年４月16日の不要協妨害波委員会の終了後、越後先生、篠塚さん、山中さんとともに、日土地ビルの地下で酌み交わしました。フェライトコア等のことが話題になっていたと思います。そのときもいつもと同じようにワインをたしなんでおられたました。そのときの岡村さんの席も忘れられません。そのときが私が見た生前の最後のお姿でした。岡村さん安らかにお眠り下さい。

岡村万春夫さんの思いで

独立行政法人　通信総合研究所
篠　塚　隆

私がEMCの世界へ足を踏み入れたのは、1988年７月の人事異動で、杉浦さん（現東北大学電気通信研究所教授）が室長をしていた「電磁環境研究室」に配属されて以来です。当時、杉浦室長から岡村さんについてCISPR会議の関係とか、英語が得意な方だとか、一緒にセミナーの講師をしたとか、一緒に飲みに行ったとか、色々噂を聞いていました。その頃岡村さんは50歳台前半ですから、一番活躍していた頃です。当時、私はEMCの新米ですから岡村さんにお会いする機会はほとんどなく、会いもしないうちから「EMC分野では怖い存在」という印象を持っていました。

その岡村さんから厳しい指導の洗礼を受けたのは、1990or1991年頃の郵政省の調査研究会の席だと記憶しています。その会議で、CRLが実験・解析した電磁環境測定結果を私が報告しました。測定車に受信機とアンテナを乗せて受信しながら東京都内を走り回り、測定環境別（都市地域/住宅地域）で区分した放送波帯などの電界強度を測定した結果を報告しました。

測定結果の一つの結論として電界強度の強度分布が正規分布をしているという報告をしました。その際、岡村さんから「どうして正規分布をしていると言えるのですか？　分布の形を見ただけで正規分布をしていると言うのは科学的ではない。」という厳しいコメントを頂きました。

会議の後、急いで電界強度分布の統計検定を行い、その結果を次回の会議で報告して岡村さんの質問に答えたことを思い出します。生半可な解析で結論を出すような安易な態度を戒められた例で、その後、私にとって良い教訓になりました。

CISPR会議でも大変お世話になりました。会議の内容の話は皆さんがお書きになると思うので、私はafter meetingのお話を主に紹介します。１GHz以上の妨害波測定がCISPRで問題になり始めた頃、1994年６月に、

筆者が出向していた仙台/環境電磁技術研究所を訪問された岡村夫妻と伊東さん（左）と筆者（右）（1997/7/11）

France/Paris/CNETでCISPR/A,B/WG/ad-hoc会議が開催されました。岡村さん、NTT/小林岳彦さん、それに私の３人で出席しました。私は電子レンジ妨害波の測定データ（統計データ）を持って、小林さんが同じ電子レンジからの妨害波によるPHS回線への干渉データ（BER劣化データ）を持って会議に参加しました。今になって当時の資料を読み返すと、そのころの議論が現在の測定法や許容値の基礎になっていることがよく分かります。

ad-hoc会議が終わり、帰国前日の晩にショーを見に行きました。司会者はマジシャンで、色々な国のお客を壇上にあげて手品をしたりおしゃべりで観客を沸かせていました。そのうち、司会者が我々の席へ来ていきなり岡村さんの手を引っ張って壇上へ連れて行きました。岡村さんは、マジシャンから時計を抜き盗られる等のショーに乗せられていましたが、百人は超えるであろう大観衆を前に堂々と司会者と渡り合い、最後には「さくら」の歌を歌い、大喝采を受けていました。この時は、岡村さんは本当の国際人なのだという感を深めました。

CISPR会議に参加すると、会議後に審議結果などをまとめて日報を作ったり、帰国後のCISPR国内委員会で会議結果の報告をします。そのため、会議後の日報作成は非常に重要で、精神的にきつい仕事でした。しかし、SC/Bに参加した委員は、岡村さんの議事録があるので非常に安心しておれました。

岡村さんは、SC/B会議が終了すると、SC/Bのsecretaryとして議事録を作成し会議期間中にChairmanに報告していました。そのため、岡村さんはSC/Bの会議後に徹夜で議事録を作成していました。私が初めてCISPR/York会議(1990年)に参加して以来、10数回の会議を御一緒しましたが、毎回徹夜で議事録を作成していたようです。でも、さすがに60歳を過ぎた頃からの徹夜はきつそうで、最近の会議では徹夜明けの表情に疲れが見えていました。これらの物理的・心理的過労が岡村さんの体を蝕んでいたのではないかと悔やまれます。岡村さんにおんぶにだっこされていた我々のだらしなさを反省せずにいられません。

最後に、これまでの岡村さんの御指導御鞭撻に感謝し、ご冥福を心からお祈りいたします。

岡村万春夫さんを偲んで

日本電気㈱
鈴木　健次

1　おかむら　まんはるお？

私が岡村万春夫さんの名前を知ったのは、旧JEIDA(㈳日本電子工業振興協会）からFCC（米国・連邦通信委員会）のコンピュータに対する規格案について、意見を出すようにと協会から依頼された文書の１ページに「JMI　岡村万春夫」と手書きの文字が書いてあったときである。

FCCの規制が始まる数年前であるから、1975年頃だったと思う。

「この名前、どっかで見たことあるよ！」。

この頃、会社でコンピュータの雑音測定（今で言うEMC測定）の規格作りをやっていた私は関連する規格を読み漁っていた。当時、EMCに関する規格はMIL（米国軍用）規格、VDE（独国・電気技術者協会）規格と我が国の電気用品取締法の技術基準しかなかった。これらの規格はコンピュータのものではないため、規格づくりのために、郵政省の電波技術審議会（当時、現・総務省・情報通信技術審議会）の答申書を手に入れ端から読み漁っていた。

「ああ、電波技術審議会の答申書に載っているよ」。

「でも、名前の読み方はなんて読むんだろうネ」

「“まんはるお” じゃないよね」

万春夫（ますお）という呼び名を知ったのは、その後、かなり経ってからである。何しろ名刺というものを貰ったことがない。長い付き合いなのに。

2　岡村委員長

FCCでコンピュータの規制が始まった頃、旧JEIDAにEMCの委員会がつくられることとなった。EMCの委員会は関連業界でも始めてである。最初の会合で、岡村さんは窓側の主席の位置に座っていた。私はちょうど反対側の事務局の隣である。会社としてパソコン関係の事業部から委員を出すべきとして汎用コンピュータを担当している私はオブザーバーとして参加させていただいた。事務局・清課長から、委員の紹介に続き委員長を選出し、岡村さんが委員長となった。

「この人が岡村万春夫さんか」

岡村さんはFCCを始めいろいろな国や機関の話をなされた。

「この委員会で出よう。」

会社に帰ってから、上司や本社部門と掛け合って、やっとの思いで参加することとなり長～い付き合いが始まった。

1982年：旧JEIDAのEMC対策専門委員会設立の時である。

数年後にイミュニティ問題が顕在化し、イミュニティ作業班をこの委員会の下につくった。この作業班の主査を「鈴木君、やってくれよ」の一言で任された。この作業班は、1989年に電波障害・イミュニティ対策専門委員会として独立し、EMC対策専門委員会はEMC規格動向専門委員会と名を変え、さらに岡村委員長のお世話を受け続けるとことなる。

“EMC” という言葉は岡村さんが使うものとして、我々の委員会は止むを得ず“電波障害・イミュニティ”というながったらしい言葉に替えた、岡村さんに敬意を表して。

ライン川のほとりで（1998年フランクフルト会議：左から岡村さん、篠塚氏、筆者）

3　食事にするか？

岡村さんとは、旧JEIDAや不要協やCISPRなどで海外へ御一緒させていただくことが多かった。岡村さんは食事時になると必ず「食事にするか」と誰よりも先におっしゃる。

誰もが「飯か」と思うと「じゃ中華にしよう」と言われ、中華を食べる羽目になる。「食事にする」イコール「中華を食べる」ことである。

ある時、中華ばかりじゃ飽きたので「食事にするか」と言われたとき、すかさず「シーフードにしましょう」といってみた。この時、岡村さんと初めてシーフードを食べれることになった。でも、本当は「しぶしぶ」付き合ってくれたのである。その後、そのツアーでは「食事にしよう」ということは言わず、いきなり「中華にしよう」であった。

数年前から、中華が和食に変わった。「中華じゃないんですか？」と言ってもただ笑っているだけだった。今考えるとこの頃から変わってきていたのかもしれないと思うと、残念で仕方ない。

4　馬が合う？

岡村さんと一緒に行動していると、少し歩いては「お茶でもするか」と言われることが多い。他の人は「まだ見たりないところがあるのに」と思うらしいが、私にはちょうど喉が渇いて一服したいところなので「お茶しましょう」と二人で決定してしまう。この行

動パターンは私には非常に助かった。でも、この性か別行動する人も出始めた。

歩くのも速いし、じっとしていることが出来ない人で、もしかしたら、「お茶にしよう」というのは「私を思ってのことかな」と思い巡らしている。

5　迷　訳

岡村さんの英語は抜群である。会議のメモを英語で取っている。さすがCISPRのセクレタリーをやっている人だと感心する。

でも、岡村さんでも誤訳をすることがある。私の知る限り、2回ある。

英語の“No”を日本語の“の”に訳すのである。「否定文が肯定文になっちゃっているよ」。

岡村さんに責められたときの仕返しの一言である。

6　最後の資料

4月23日月曜日、来月の会議の資料がメールで送られてきた。CISPR文書などを訳したもの3点。ファイルを整理しないうちに、資料の説明も聞かないうちに亡くなってしまった。

「EMC規格動向専門委員会をどうするのよ、岡村さん」

後を引き継いだものの、久しぶりの委員長なのであたふたして上手くいかない。

情報ルートも岡村さんの比ではないし、英語も一杯飲みながらスイスイと訳せやしないし……

「判らないことを誰に聞けばいいのよ、岡村さん」

「そろそろ、EMCから足を洗おうかなと、真面目に考えたくなるよ、岡村さん！」

以上

真の国際人 岡村さん

CISPR運営委員会　委員
CISPR国内委員会　委員長
育英工業高等専門学校
仁田　周一

岡村さんと初めてお会いしたのが、いつどこなのか全く憶えていない。名刺入れを探しても岡村さんの名刺が見当たらない。恐らく、名刺交換もせずに、何となくお付き合いが始まったのであろう。ただ、1984年、日本で初めて開催されたEMC国際シンポジウム会場の廊下で擦れ違った時に、二言～三言お話ししたことをはっきりと憶えている。その10年前に岡村さんは、早くもロンドンでのCISPR国際会議に出席されていること。その後のSub committee Bの幹事に至る最近までの岡村さんの、CISPRは勿論のことより幅広い国際的な御活躍は単なる誉め言葉ではとても言い表せない。流暢な英語は勿論のこと長年に亘るご経験とよく整理され、学問的・技術的に裏付けされた豊富で正確な知識、判断、アイデア等々そうそう真似できるものではない。

岡村さんのご活躍の詳細については、多分、東北大学の杉浦先生他がお書きになられると思うので、ここでは私の岡村万春夫像を記して、私自身の思い出として残しておきたい。

1　岡村さんはJQAにいる

通常、人を呼ぶ時「……社の……さん」と所属が先にきて、次に人名がくる。私から見て岡村さんは「JQAの岡村さん」ではなかった。あくまで「岡村さん」であり、敢えて言えば「岡村さんはJQAにおられる」であった。このような言い方は、ある種の人達には失礼なことかもしれないし、ひょっとしたら岡村さんにも失礼であったかもしれないが、どうしてもこの

1998年フランクフルト会議におけるCISPR運営委員会のメンバー（後列左からDr. Hunter（豪）、Mr. Beckley（英）、筆者、Dr. Baillif（IEC）、Mr. Despres（仏））

ような認識になってしまう所が、彼の国際人たる所以のような気がする。

その博識や実力は「組織をバックにした力」ではなく、あくまでご本人の資質の高さと努力によって得られたものであると思う。

このようにありたいと願うのは私だけではない。見習うべきであるし、今後の我が国のエンジニアの多くは「……さんが、いま……にいる」となっていくであろう。

2　日本食でなければ

長年のお付き合いにも拘わらず、1998年のフランクフルト会議まで、岡村さんが「日本食なしでは生きていけない人」だとは知らなかった。

フランクフルト会議のバンケットは、いかにもドイツらしく、堀立小屋のなかに、一昔前の学食のように背凭れのない長椅子をおいた、レストランというよりも食堂で行われた。他のお客さんも沢山おられるし、ブュッフェ形式でも、コース料理でもない。サンクトペテルブルグやブリストルのように弦楽四重奏のような格調高い音楽では勿論ない。流しのアコーディオン弾きがやってきて、リクエストと引換えにチップを渡す。食事は、大きな皿に山盛りの食物がのっており、この一皿だけがディナーである。私は、これをすべて平らげて腹一杯になった。岡村さんは、全く口をつけない。翌日、ご本人に聞いた所では、帰りに旧市街へ行ってパックされた稲荷寿司を夕食にされたらしい。サンディエゴでは、毎夕、タクシーで日本食レストランに行っておられたとのこと。また少食であることに、驚きもした。

真の国際人は自国の文化に精通している。日本食もれっきとした日本の文化である。

3　ピシッときめた服装

私の妻は「岡村さんは、決める時にはピシッと決められるね」といつも言っている。ラフな服装をしても、ダラーッとはしていない。細身の身体に紺のスーツは見事であった。TPOを心得た服装に感服している。お葬儀の時のワイングラスを持った写真は、いかにも彼らしく、私の目に焼きついており、決して忘れることはないだろう。

4　雑　感

聞くところによると、亡くなる前日も夜遅くまで（夜明けまで）自宅で仕事をされていたとのこと。睡眠時間を削って、亡くなる寸前まで自己の向上に努められていたことに敬意を表したい。

ところで、岡村さんと私が卒業年度が同じであることを知ったのは、知り合ってから随分と月日が過ぎた後のことであった。その白髪といい、貫禄といい、誰が見ても私より先輩に見えた。同じ卒業年度であることが判っても、ご本人自身も「自分が先輩」と無意識に思われることが多く、私に対してもそのような付き合いが最近になるまで多かった。ここ数年は同期としての付き合い方がやっとお互いに出来るようになった矢先の訃報であった。

静かで思慮深く、それでいて存在感のあった岡村さんが亡くなって、早くも半年近くが過ぎた。いつも他の人達を慮っておられた真の国際人の岡村さん、お疲れさまでした。

ゆっくりとお休み下さい。　　合掌

岡村さんの想い出

独立行政法人　通信総合研究所
山中　幸雄

岡村さんとの出会い

私は、昭和58年（1983）の春、郵政省電波研究所（現：通信総合研究所）に入所し、研修後、その年に新設された電磁環境研究室に配属された。研究室の室長が、杉浦さん（現東北大教授）であり、当時から杉浦さんは電技審、CISPR、アンテナ較正等々様々な局面で岡村さんと一緒に仕事をされていた。岡村さんとの最初の出会いは良くは思い出せないが、杉浦さんを通じて岡村さんに紹介されたものと思われる。但し、このころは、雲の上の人という感じであるから、挨拶程度の会話しかしていない。それでも、杉浦さんから折に触れて岡村さんの話（友人ではあるが緊張感のある関係であること、英語が堪能であること、業界に対して強い指導力を持たれていること、ダンディであること等）はしょっちゅう聞かされており、岡村さんには何かしら親近感を感じていた。また、新人の私にも優しく接して頂いた。

この当時の想い出としては、杉浦さんの鞄持ちで、岡村さんを始め、清水先生（当時、東工大）、石野さん（当時、TDK）らとTDKの工場見学・講演旅行をしたことがある。講演では、清水先生が電磁気の基本を、岡村さんが妨害波の規格・海外動向を、杉浦さんが妨害波測定法の話しをされ、非常に有意義で印象的な旅行となった。当時は、パソコンが急速に普及して、これに伴いEMCの問題が顕在化した時期でもあり、このメンバーで良く講演会を行われていたようである。

また、当時、岡村さんが日本で最初に作られた反射箱をお借りし、研修に来ていた学生と一緒にデータを取ったこともある。CISPR16-1にある反射箱の規格は、岡村さんをはじめとする日本の寄与で完成されたとのことである。現在、基本規格IEC61000-4-21の作成を目指して再検討を行っているが、妨害波測定に関しては、是非ともCISPR16-1の精神を守って行きたいものと考えている。

CISPR、電技審

1996年のマンデリュー（フランス）会議から、私もCISPR/Aに参加することとなり、この時期から、岡村さんとお会いする機会も増えて来た。具体的な仕事に関するお話をさせて頂けるようになったのも、この時期からと言える。

CISPRでは、語学力不足のため、審議内容を把握できない時は、岡村さんに議論の中身を教えて頂くことが多かった。また会議中に、直接英語で議事録を作っておられることもあり、さすがにCISPR/Bの国際幹事をやられている方は違うと感心した。この議事録は、会議終了後に出席者でその日の報告書を作成するのに多いなる助けになった。また、国際会議の間には、一緒に食事（岡村さんは中華がお好きであった）に行ったり、休日には、旅行に行ったりして、いろんなお話をして頂いたのも良き思い出である。特に、フランクフルト会議の時のライン川下り、バーデン・バーデンの温泉、サンクトペテルブルク会議の時のエルミタージュ美術館の見学、市内散策などが印象深い。

さらに、電技審や各種の委員会に出席するようになり、殆どの委員会で岡村さんとご一緒することになった。国内の委員会では、殆どの場合、岡村さんと杉浦さんがイニシアチブをとり、会議を進める形となっており、お二人が激論を戦わせながらも、最後はうまくまとめるやり方には感心させられたものである。特に、野島主任の元でおこなったCISPR16-1、及びCISPR16-

2の国内規格化作業は、それぞれ一年を要し大変な作業であったため、特に印象深い。郵政の会議室、飯倉分館、さらにはドコモやNTTの施設で合宿等しながら、パソコンとプロジェクタを用いて皆で一文づつ修正・確認して中身を確定していったが、岡村さんのご意見はいつも貴重であったと記憶している。

不要電波問題対策協議会

この頃、不要協の妨害波委員会で1GHz以上の測定法のガイドを作ることになり、その作業班の一員としてメンバーに加わることとなった。委員会は、実質的には岡村さんがリードされており、テーマの選定、担当者の割り当て、等が岡村さんの提案によって決まっていた。岡村さんの執筆されるべき部分（国際動向）はすでに完成しており、その仕事の速さに驚かされたものである。この委員会では、KECやTELECに出かけて行って実験を行ったり、報告書を作る合宿を行ったり、いろんな人と知り合える非常に良い機会となった。このような仕掛けも工夫して作られていた。また、作業班や委員会の後には、岡村さんに誘われ、日土地ビルの地下で飲むこともしばしばであった。ご自身ではあまり飲まれないのであるが、人にすすめるのがお好きだった。岡村さんの視点が良かったからであろうか、このガイドは、不要協の報告書の中でも人気の高いものの一つであると聞いている。

最後に

岡村さんの訃報は、本当に突然であった。亡くなる１週間前には、不要協の妨害波委員会の今年度の計画を承認してもらい、例のごとく日土地ビルの地下で杯を重ねたばかりであった。CISPR/Bristol会議についても、Londonでは一緒のホテルに泊まろうとメールで相談していた矢先のことであり、まさに呆然とするばかりであった。

今にして思えば、もっといろいろなことをお聞きしておけばと後悔するばかりである。今後は、力不足の身ではあるが、岡村さんの築かれたEMCの分野のさらなる発展に、いささかでも貢献できればと考えている。岡村さんのご冥福を心からお祈り致します。

1998年CISPR /Frankfurt会議にて（左から野島さん、筆者、杉浦さん、岡村さん）

岡村万春夫さんの思い出

株式会社NTTドコモ
野島　俊雄

私が岡村さんと初めて知り合ったのは10年以上前だったと思います。ISM機器放射からの無線保護か何かを扱う、CCIR（現ITU-R） SG-1の国内委員会で、岡村さんが主任（委員長？）で私はNTTの一委員という単なる仕事上の関係でした。その後、CISPR委員会を初め各種のEMC関連の会議や調査研究会等でご一緒する多くの機会を持つようになって、公私共に大変お世話になりました。多くの思い出がありますが、この機会を借りまして強く印象に残っている思い出話を二つ記述して、岡村さんに感謝申し上げると共に深くご冥福をお祈りしたいと思います。

一つ目の話は、岡村さんがCISPR SC-Bのセクレタリーを長年に亙り高い評価を得つつ立派に務められてきたことです。多くの人がご存知のように、これは岡村さんが、技術知識は元より高い英語力と外国人とも親密に交際できる幅広い教養を持たれていたからに他なりません。私が様々な国際会議に参加して多くの場面で大変残念に感ずる事柄の一つが、日本人の英語力の低さと国際的教養の欠如です。私自身も無論含まれる訳ですが、飛躍的にこれらの欠点を克服しない限り、今後我が国が少なくとも標準化の世界で国際的なリーダシップをとっていくことは期待できないでしょう。具体例は省略しますが、岡村さんは確実にこれらについて国際レベルの能力を持っていた数少ない日本人の一人でした。岡村さんと同等の能力を持った若い技術者集団を育成していくことが、私たちの早急な使命であることは間違いありません。

二つ目の話は、岡村さんの優しいお人柄に関するものです。各国持ち回りのCISPR会議に参加して、岡村さんを中心に気の合う方々と現地での観光や会食をすることは余禄的な楽しみの一つでした。中でもフランクフルトの会議ではバーデンバーデンまで足を伸ばしてローマ風呂につかり、現代の生きたビーナス像の数々を心行くまで観賞したのは忘れられない思い出です。制限時間の３時間をフルに利用しなければ駄目だと篠塚先輩が主張するのに、岡村さんがそんな元気はないよと１時間早く退出されたことが鮮やかに思い出されます。ここに載せた写真は、2000年のセントペテルスブルグ会議の公式パーティでのものです。田舎者の私が、パーティで披露された歌の素晴らしさと歌姫の美貌に眩んで一緒の記念写真を望んだ際に、杉浦先生が恥の極みだと言われたのに対して岡村さんが持っていたカメラで撮ってくれたものです。私はこの写真を見るたびに、ファインダーを覗きながら優しく微笑んでくれている岡村さんの姿を思い浮かべます。

合掌

岡村さんが撮影してくれたセントペテルスブルグ思い出の写真

あとがき　追悼の辞

不要電波問題対策協議会会長
名古屋工業大学　名誉教授
池田　哲夫

岡村万春夫様が４月25日に急逝されました。謹んでご冥福をお祈り致します。岡村様のご業績につきましては、多くの方が述べておられますので、在りし日の岡村様を偲ぶことで追悼の意を表したいと思います。

岡村様に初めてお目にかかったのは、何時のことであったかはっきりしません。年齢が近いこともあって、非常に親しくさせて頂きました。昭和62年（1987）から始まった不要電波問題対策協議会では最初からご一緒させて頂いております。また、平成２年（1990）から日本工業技術振興協会において、電磁シールド技術委員会を数年に亘って開催致しました。この委員会においては当初から講師をお願いしております。このようなことから、昭和50年（1975）代中頃からはいろいろと教えて頂いていたと思われます。平成４年（1992）からは当時の機械検査検定協会、現在の日本品質保証機構（JQA）で開催している電磁環境実態調査委員会の委員長を担当させて頂いております。ここでは、いろいろな技術的な問題を討論させて頂きました。

岡村様のことで一番思い出が残っているのは、やはりIEEE　EMCシンポジウムにご一緒に参加させて頂いたことでしょうか。あれは平成４年（1992）のアナハイムで開催された時でした。郵政省通信総合研究所（現在東北大学電気通信研究所）の杉浦先生、ＴＤＫの石野氏らとともに訪問いたしました。学会の前の週にボルダーにありますNISTの今は亡き神田先生をお尋ねし、世界の標準とも言えるNISTのオープン・サイトを見学した後、Ｓパラメーターから材料定数を算出する場合の問題点などをディスカッションいたしました。その夜は神田先生と奥様もご一緒に数人で近くのレストランで食事を致しました。岡村様はあまり多くのお酒は召し上がりませんが、楽しみながら飲むことは皆様もご承知のとおりです。その日はたしかニュートンと言う名前のカリフォルニァの白ワインをかなりの量を飲んだと思います。その夜のホテルは全館禁煙でビールの空き缶にタバコの吸殻を入れて、朝早く捨てに行ったのを覚えております。デンバーからロスアンゼルスへの空路からは一寸回り道になりますが、週末をラスベガスで過ごしました。このときには岡村様の意外な一面を見せて頂きました。その夜は皆さんそれなりにカジノを楽しんだわけですが、勝ったのは岡村様一人でした。次の日に全員にご馳走して赤字になったと言っていましたが。勿論アナハイムの学会にも参加いたしましたが、そのときの参加メンバーで、赤尾先生、神田先生、そしてこのたび岡村様が亡くなられたことは、非常に悲しいこととして思い出されます。

平成４年からは、前述のようにJQAで委員会を開催しております。年に数回開催するのですが、その都度報告書の内容についてディスカッションをしたことが懐かしく思いだされます。岡村様は規則や規格の分野だけでなく、実験的な面でも非常に博識でした。ディスカッションは実験方法から、データの処理、データの評価にまでおよび、あるときには丁寧にあるときは

厳しくご指導頂きました。例えば、平成５年度においては、「住宅地域の電磁環境実態調査」を行い非常に多くの測定を行いました。この測定値をデータ処理するためのｄＢ単位での分布において、正規分布という仮説が採択された場合の中央値と標準偏差の持つ意味と、正規分布であるという仮説が棄却された場合の中央値と標準偏差の持つ意味などについて細かい議論をいたしました。委員会終了後は大抵新橋の駅前で時間の許す限り積もる話に花を咲かせました。また、平成８年の委員会は「大型機器のイミュニティ試験方法に関する調査研究」でした。大型機器は電線で接続されたシステムとして動作するために、接続されている他の機器の評価にも種々のご意見を頂きました。この年には、通商産業省の担当が青柳様でしたが、ご一緒に名古屋にお出で頂き、意見の交換を致しました。最後にご希望で名古屋の名物の味噌煮込みきしめんを暑い中で食べたことを思い出します。

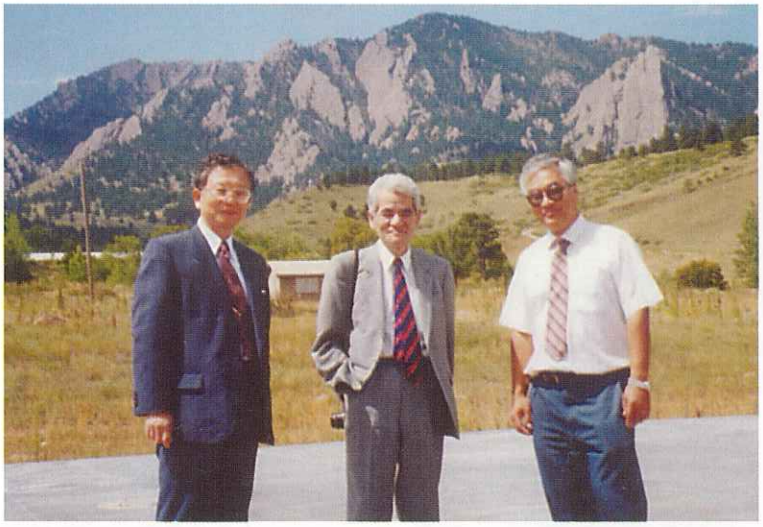
越後湯沢で行われております電子情報通信学会のEMCのワークショップには、岡村様は第一回（平成元年、1989）からほとんど参加されております。第一回には「EMI関連規格における技術的諸問題」として講演を頂いております。岡村様のご講演はゆっくりとしたペースでお話になられます。当日用意されるOHPも数枚のことが多いと思います。この頃のOHPの原稿は非常に大きな字ではっきりと書いてあるものが多かったと思います。最近は、パワーポイントを駆使され、非常に凝った造りとし丁寧に色を着けておられます。越後湯沢では、初期の頃から懇親会でお話頂ける事を楽しみにしておりました。何回も同じ部屋になったことがあると思います。

また、名古屋の中部エレクトロニクス振興会では、ここ数年EMCの初心者講習会を開催しております。この講習会に於いてもEMCの規則の体系や規格値に対する考え方などについて、何度かご講演を頂いております。

わたくしは、CISPRの委員会には関係しておりませんので、この委員会における思い出は御座いません。しかし、岡村様の思い出は、次から次へと走馬灯のように駆け巡ります。特に、幾度となく新橋の駅前で最終列車の時間までお酒をいただきながら雑談したことは懐かしい記憶です。

あまりにも早く、そしてこちらの心の準備も無いままに急に逝かれましたことを非常に残念に思っております。これからもEMCの問題はますます高度化すると共に複雑になるものと考えられます。このような時期に岡村様から適切なご助言やご指導がいただけないことは誠に残念に思います。

最後に岡村様のお姿を思い出しつつ、ご冥福をお祈りして筆を置くことといたします。



米国国立標準技術研究所NISTのオープンサイトで（1992年、左から筆者、岡村さん、故神田さん）

【岡村万春夫氏の御業績】

◆御略歴

岡村　万春夫　昭和11年1月3日生	
昭35年	早稲田大学工学部電気工学科卒 日本機械金属検査協会（JMI）入社（現、日本品質保証機構）
（この間）	CB無線機の輸出検査に携わる（無線に関係することになる契機）。NHK技研や電波研（CRL）に知己を得る
昭43年	電波課長 米国電波法等を学ぶため、米国連邦通信委員会(FCC)にて研修。FCC部長宅に３ヶ月寄宿。英語の特訓を受ける
昭54年	電波部長
昭60年	電波試験所所長
平３年	理事
平７年	顧問
平成13年4月25日没（享年65歳）	

◆御研究および御活動

昭47年	電波技術審議会専門委員（第３部会）。これ以後、CISPR関係の各種分科会でオピニオンリーダ的役割を果たす。
昭49年	国際無線障害特別委員会（CISPR）ロンドン会議に出席。これ以後、毎年CISPR会議に参加。
昭53年	国際無線通信諮問委員会（CCIR：現ITU-R）京都総会に、Mr. Dickson（SG-1 Chair）の推薦により米国代表として参加。
昭54年	CISPRハーグ会議で初めてFCC/Mr. Wallと会う。それ以後、我国のEMC関係者にMr. Wallを紹介。
昭55年	我国で初めてCISPR会議を開催。JMIが事務局を努め、氏の貢献は極めて大。
（この間）	FCC及びCISPRでITEの妨害波を問題にし始めたため、セミナー・新聞・雑誌等で大いに啓蒙活動に努める。
昭59年	我国初めてIEEE/EMCシンポジウムを開催。氏が大いに貢献。
昭60年	電気通信技術審議会専門委員CISPR関係委員会の主査としてCISPR 22国内答申に尽力。また、CCIR委員会SG-1の副主査も務める。
昭62年	CISPR 国際委員会SC B Secretary 不要電波問題対策協議会設立に多大なる貢献。以後、指導的役割を担う。
平２年	電波障害防止中央協議会・功労者表彰
平９年	CISPR横須賀会議開催に当たり、多大なる貢献。
平13年	情報通信審議会専門委員

この他、不要電波問題対策協議会設立と同年頃から、通産省のEMC関係各種委員会に多大なる寄与。また、各種の標準化会議にも貢献。さらに、日本電子工業振興協会（JEIDA）や情報処理装置等電波障害自主規制協議会（VCCI）などの各種工業会のEMC委員会で活躍。

CISPRの審議組織

2001年12月現在

会議の種別	所掌事項	議長及び幹事	Working Groupの所掌事項	議長及び幹事	我が国のExpert Member
総会 (Plenary Assembly)	議長等の選出、組織の改正等	Chairman：P.J.Kerry（U.K） Secretary：D.Eardley（U.K） Assistant Secretary：J.B.Childs（U.K）	Vice Chairman：B.Despres（France）		
運営委員会 (Steering Committee)	議長へのアドバイス等	Chairman：P.J.Kerry（U.K） Secretary：C.Beckley（U.K）			仁田　周一 (育英工業高専)
A小委員会 (Sub-committee A)	無線妨害波測定及び統計的手法	Chairman：D.N.Heirman（U.S.A） Secretary：W.Schaefer（U.S.A）	WG1：無線妨害波測定機器	CH：D.N.Heirman（U.S.A） Sec：W.Schaefer（U.S.A）	野島　俊雄 (ＮＴＴドコモ) 山中　幸雄 (独立行政法人通信総合研究所)
			WG2：妨害波のパラメータ測定	CH：M.Stecher（Germany） Sec：B.Gorini（Itary）	篠塚　隆 (独立行政法人通信総合研究所)
B小委員会 (Sub-committee B)	工業、科学及び医療用高周波装置、電力線、高電圧及び電気鉄道からの妨害	Chairman：A.Kohling（Germany） Secretary：K.Okamoto（Japan）	WG1：工業、科学及び医療用高周波装置からの妨害	CH：A.Kohling（Germany） Sec：B.Despres（France）	井上　正弘 (松下電器産業)
			WG2：電力線信号通信、配電及び発電設備とシステム、機器と電気鉄道からの電磁妨害	CH：J.L.GutierrezIglesias（Spain） Sec：S.Ioan（Romania）	富田　誠悦 (電力中央研究所) 川崎　邦弘 (鉄道総合技術研究所)
D小委員会 (Sub-committee D)	自動車及び内燃機関が駆動する装置の電気／電子装備品に関する電磁妨害	Chairman：P.Andersen（U.S.A） Secretary：F.Ackermann（Germany）	WG1：建物内、道路沿い又は屋外地域で使用の受信機保護	CH：P.Andersen（U.S.A） Sec：F.Ackermann（Germany）	近田　隆愛 (スタンレー電気)
			WG2：車載及び周辺車両受信機の保護	CH：P.Ackermann（Germany） Sec：K.Hansen（U.S.A）	近田　隆愛 (スタンレー電気)
F小委員会 (Sub-committee F)	モーター及び接点装置を内蔵している機器、照明装置及び類似のものからの妨害並びにイミュニティ	Chairman：J.D.Coenraads（NL） Secretary：W.Zuidinga（NL） Assistant Secretary：M.C.Vroljk（NL）	WG1：モータ及び接点装置を内蔵している家庭用電器機器	CH：J.D.Coenraads（NL） Sec：W.Zuidinga（NL）	井上　正弘 (松下電器産業)
			WG2：照明器具	CH：P.Archer（U.K） Sec：T.Almering（NL）	平伴　喜光 (松下電工)
H小委員会 (Sub-committee H)	無線通信保護のための妨害波許容値	Chairman：B.Despres（France） Secretary：C.M.Verholt（Denmark）	PT CISPR-31：無線局特性のデータベースの文書化	Project Leader：C.M.Verholt（Denmark）	山中　幸雄 (独立行政法人通信総合研究所)
			PT CISPR-32：妨害波許容値の根拠の明文化	Ad-hoc Leader：L.Dunker（Germany）	山中　幸雄 (独立行政法人通信総合研究所)
			PT CISPR-33：各製品規格のEMC規定の調査	Convener：F.Jacquin（France）	山中　幸雄 (独立行政法人通信総合研究所)
			PT CISPR-34：妨害波の基準許容値（genericlimit）を超える製品許容値の根拠のデータベース化	Convener：F.Jacquin（France）	山中　幸雄 (独立行政法人通信総合研究所)
I小委員会 (Sub-committee I)	マルチメディア機器等の妨害及びイミュニティ	Chairman：M.Wright（U.K） Secretary：K.Okazaki（Japan） Assistant Secretary：F.Amemiay（Japan）	WG1：放送受信機等のエミッション及びイミュニティ	CH：H.kolk（Netherlands） Sec：TBD	岡崎　憲二 (ソニー)
			WG2：マルチメディア装置のエミッション及びイミュニティ	CH：R.Storrs（Sweden） Sec：TBD	雨宮　不二雄 (ＮＴＴ－ＡＴ) 岡崎　憲二(ソニー)
			WG3：情報技術装置からの妨害波（公衆通信網、ＬＡＮなどに接続される機器からの妨害波を含む）	CH：M.Wright（U.K） Sec：S.Scott（U.K）	雨宮　不二雄 (ＮＴＴ－ＡＴ) 長部　邦廣 (情報処理装置等電波障害自主規制協議会)
			WG4：情報技術装置のイミュニティ	CH：J.Davies（U.K） Sec：TBD	田上　雅照 (通信機械工業) 山路　公紀 (日立製作所)

【ブリストル会議において他の小委員会に移管又は吸収された小委員会】

会議の種別	所掌事項	議長及び幹事	Working Groupの所掌事項	議長及び幹事	我が国のExpert Member
C小委員会 (Sub-committee C)	電力線信号通信、配電及び発電設備とシステム、機器と電気鉄道からの電磁妨害	Chairman：D.Cristescu (Romania) Secretary： C.Beckley (U.K)	WG01：電力線信号通信、配電及び発電設備とシステム、機器と電気鉄道からの電磁妨害	CH：J.L. Gutierrezlglesias (Spain) Sec：S.Ioan (Romania)	富田　誠悦 (電力中央研究所) 川崎　邦弘（鉄道総合技術研究所）
E小委員会 (Sub-committee E)	無線受信機の妨害に関する特性	Chairman：E.Nano（Itary） Secretary：M.Borsero (Italy)	WG1：放射とイミュニティの測定法と許容値	CH：E.Nano（Italy） Sec：H.Kolk（NL）	御園生　勇 （ＮＨＫ） 岡崎　憲二 （ソニー）
			WG2：デジタル放送受信機及び関連マルチメディア機器に対する許容値及び測定法	CH：H.Kolk（NL）	御園生　勇 （ＮＨＫ） 岡崎　憲二 （ソニー） 雨宮　不二雄 （ＮＴＴ－ＡＴ） 鈴木　健次 （ＮＥＣ）
G小委員会 (Sub-committee G)	情報技術装置の妨害及びイミュニティ	Chairman： R.J.Calcavecchio（U.S.A） Secretary：A.Frey (Germany) Assistant Secretary： K.P.Bretz（Germany）	WG1：情報技術装置からの妨害波（公衆通信網、LANなどに接続される機器からの妨害波を含む）	CH：M.A.Wright（U.K） Sec：I.P.Macfarlane (Australia)	雨宮　不二雄 （ＮＴＴ－ＡＴ） 鈴木　健次 （ＮＥＣ）
			WG3：情報技術装置のイミュニティ	CH：J.H.Davies（U.K） Sec：R.L.Storrs（Sweden）	山路　公紀 （日立製作所）

CISPR国際会議出席状況

開催年	開催地		代表者名
1939	ロンドン		金原淳（逓信省）、上野七夫（ＮＨＫ）
1953	ロンドン	12回総会	藤田徳彌（ＮＨＫ）
1956	ブリュッセル	13回総会	三木七郎（ＮＨＫ）
1958	ハーグ	14回総会	
1961	フィラデルフィア	15回総会	木村　勤（ＮＨＫ）
1964	ストックホルム	16回総会	加藤一夫（ＲＲＢ）
1967	ストレナ	17回総会	
1970	レニングラード	18回総会	
1973	ウエストロングブランチ	19回総会	蓑妻二三雄（日立製作所）、遠藤幸男（ＮＨＫ）
1974	ロンドン	合同委員会	宮島貞光（ＲＲＬ）、木本（日立製作所）井上光雄（ＮＨＫ）、薮田保（高周波熱鐔）小堀（ＫＤＤ）、岡村万春夫（機電検）、清水（日立製作所）
1975	モントルー	合同委員会・臨時総会	蓑妻二三雄（日立製作所）、藤井為雄（協立）、岡村万春夫（機電検）、黒沼弘（ＮＨＫ）、山中克彦（電機工業会）、小高（トヨタ）、川角（ＫＤＤ）
1976	ニース	合同委員会	村主行康（ＲＲＬ）、岡修一郎（電子機械工業会）、遠藤幸男（ＮＨＫ）、岡村万春夫（機電検）、山中克彦（電機工業会）、珠玖（トヨタ）
1977	ドブログニク	合同委員会	宮島貞光（ＲＲＬ）、遠藤幸男（ＮＨＫ）、岡村万春夫（機電検）、澤田嘉嗣（電力中研）、石橋（東電）、蓑妻二三雄（東京農工大）、山中克彦（電機工業会）、崎村（自動車工業会）
1979	ハーグ	20回総会	蓑妻二三雄（東京農工大）、杉浦行（ＲＲＬ）、岡村万春夫（機電研）、澤田嘉嗣（電力中研）、島山鶴雄（高周波機械工業会）、田中圭助（関西電力）、川瀬眞（国鉄）、黒沼弘（ＮＨＫ）、山中克彦（電機工業会）、山口武久（トヨタ）

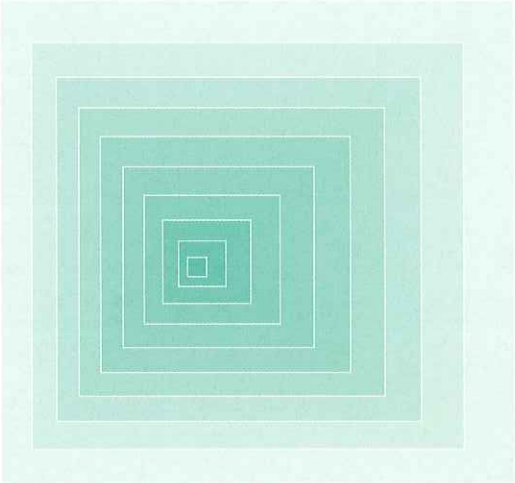
開催年	開　催　地		代　表　者　名
1980	東　京	21回総会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(ＲＲＬ)、宮島貞光(ＲＲＬ)、岡村万春夫(機電検)、牧野健一(東京電気)、村山博一(電子機械工業会)、岡修一郎(電子機械工業会)、河野進(東芝)、滝沢武(ＮＨＫ)、遠藤幸男(ＮＨＫ)、林靖(沖電気)、澤田嘉嗣（電力中研)、笹野隆生(電力中研)、川瀬眞(国鉄)、金庭充(電事連)、西本一成(東京電力)、近田隆愛(ホンダ用品研)、佐藤和郎(トヨタ)、馬場耕作(日産)、梅原一洋(日立製作所)、猪野淳之介(電機工業会)、山中克彦(電機工業会)、井上光雄（電技協)、加藤忠雄(工技院)、緒方忠雄(ＲＲＢ)
1981	トロント	合同委員会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(ＲＲＬ)、岡村万春夫(機電検)、牧野健一(東京電気)、澤田嘉嗣（電力中研)、西本一成（東京電力)、渡辺寿夫（国鉄)、黒沼弘(ＮＨＫ)、梅原一洋(日立製作所)、山中克彦(電機工業会)
1982	ストックホルム	22回総会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(ＲＲＬ)、岡村万春夫(機電検)、牧野健一(東京電気)、澤田嘉嗣(電力中研)、久保田司場男(東京電力)、西尾兼光(日本特殊陶業)、梅原一洋(日立製作所)、黒沼弘(ＮＨＫ)、山中克彦(電機工業会)
1983	オスロ	合同委員会・運営委員会	蓑妻二三雄（成蹊大)、杉浦行（ＲＲＬ)、岡村万春夫（機電検)、牧野健一(東京電力)、黒沼弘（ＮＨＫ)、梅原一洋（日立製作所)
1984	パ　リ	23回総会(50周年記念)	蓑妻二三雄(成蹊大)、関清三(ＮＴＴ)、水戸部茂(ＮＨＫ)、上中田勝明(ＮＨＫ)、岡村万春夫（機電検)、牧野健一（東京電力)、伊藤陽之介（東芝)、富山勝己(三菱)、河村史郎(トヨタ)、久保英彦(国鉄)
1985	シドニー	24回総会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(ＲＲＬ)、黒沼弘(ＮＨＫ)、山際正次(ＮＨＫ)、結城主央巳(ＮＴＴ)、川瀬眞(国鉄)、岡村万春夫(機電検)、澤田嘉嗣(電力中研)、近田隆愛(スタンレー)、井上正弘(松下電器)、伊藤陽之助(東芝)
1986	サンデイエゴ	合同委員会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(ＲＲＬ)、岡村万春夫(機電検)、黒沼弘(ＮＨＫ)、山際正次（ＮＨＫ)、結城主央巳（ＮＴＴ)、井上正弘（松下電器)、伊藤陽之介(東芝)、高川雄一郎(ＮＴＴ)、木本徹(電子機械工業会)、上地護(日本電装)
1987	カリアリー	合同委員会	蓑妻二三雄(成蹊大)、杉浦行(ＲＲＬ)、岡村万春夫(機電検)、山際正次(ＮＨＫ)、結城主央巳(ＮＴＴ)、近田隆愛(スタンレー)、井上正弘(松下電器)、伊藤陽之介(東芝)、井手口健(ＮＴＴ)、細谷泰(ソニー)、荒堀能成(東芝)、西村隆雄(日本照明器具工業会)、高川雄一郎(ＮＴＴ)、笹野隆生(電力中研)
1988	カンピナス（ブラジル)	25回総会	高木相（東北大)、蓑妻二三雄（成蹊大)、園城博康（郵政省)、杉浦行（ＣＲＬ)、結城主央巳(ＮＴＴ)、黒沼弘(ＮＨＫ)、岡村万春夫(機電検)、荒堀能成(東芝)、近田隆愛（スタンレー)、細谷泰（ソニー)、井上正弘（松下電器)、井手口健（ＮＴＴ)、伊藤陽之介（東芝)、高川雄一郎（ＮＴＴ)
1989	コペンハーゲン(デンマーク)	合同委員会	高木相（東北大)、蓑妻二三雄（成蹊大)、園城博康（郵政省)、田中耕作（郵政省)、杉浦行(ＣＲＬ)、結城主央巳(ＮＴＴ)、岡村万春夫(機電検)、河野通(東芝)、笹野隆生（電力中研)、近田隆愛（スタンレー)、黒沼弘（ＮＨＫ)、細谷泰(ソニー)、井上正弘(松下電器)、井手口健(ＮＴＴ)、伊藤陽之介（東芝)、雨宮不二雄（ＮＴＴ)
1990	ヨーク（イギリス)	合同総会	蓑妻二三雄（成蹊大)、草川慶一（郵政省)、杉浦行（ＣＲＬ)、篠塚隆（ＣＲＬ)、結城主央巳(ＮＴＴ)、田中喜好(ＮＴＴ)、岡村万春夫(機電検)、河野通(東芝)、杉山昌（島田理化)、笹野隆生（電力中研)、富加見昌雄（ＪＲ東日本)、稲津雅弘(トヨタ)、黒沼弘(ＮＨＫ)、細谷泰（ソニー)、井上正弘（松下電器)、雨宮不二雄（ＮＴＴ)、伊藤陽之介（東芝)
1991	ベルリン（ドイツ)	26回総会	高木相(東北大)、蓑妻二三雄(成蹊大)、菊池紳一(郵政省)、水町和寛（郵政省)、杉浦行（ＣＲＬ)、篠塚隆（ＣＲＬ)、結城主央巳(ＮＴＴ)、雨宮不二雄(ＮＴＴ)、小林一義(ＮＴＴ)、平田健三（ＭＫＫ)、岡村万春夫（機電検)、野田臣光(東芝)、杉山昌(島田理化)、笹野隆生(電力中研)、山本武仁(ＪＲ東日本)、川村武彦(鉄道総研)、川崎邦弘(鉄道総研)、近田隆愛(スタンレー)、和食暁(ＮＨＫ)、細谷泰(ソニー)、井上正弘（松下電器)、鈴木健次（日本電気)、伊藤陽之介（東芝)
1992	ワルシャワ(ポーランド)	合同委員会	仁田周一(東京農工大)、徳田正満(ＮＴＴ)、蓑妻二三雄(成蹊大)、水町和寛(郵政省)、篠塚隆（ＣＲＬ)、小林一義（ＮＴＴDoCoMo)、岡村万春夫（ＪＭＩ)、福嶋義征（富士電波工機)、岸本卓郎（日本電気三栄)、野田臣光（東芝)、須永孝隆（電力中研)、山本武仁（ＪＲ東日本)、川村武彦（鉄道総研)、川崎邦弘(鉄道総研)、近田隆愛(スタンレー)、和食暁(ＮＨＫ)、細谷泰(ソニー)、井上正弘(松下電器)、雨宮不二雄(ＮＴＴ)、伊藤陽之介(東芝)

開催年	開　催　地		代　表　者　名
1993	ロッテルダム (オランダ)	合同委員会	高木相（東北大）、蓑妻二三雄（東京理科大）、高橋浩二（郵政省）、徳田正満（ＮＴＴ）、篠塚隆（ＣＲＬ）、小林一義（ＮＴＴDoCoMo）、岡村万春夫（ＪＱＡ）、野田臣光（東芝）、岸本卓郎（日本電気三栄）、安藤誠（電事連）、富田誠悦（電力中研）、川村邦弘（鉄道総研）、浦野純一（ＪＲ東日本）、川崎邦弘(鉄道総研)、近田隆愛(スタンレー)、長谷川祐之（スタンレー）、細谷泰(ソニー)、和食暁(ＮＨＫ)、井上正弘（松下電器）、鈴木健次（ＮＥＣ）、雨宮不二雄（ＮＴＴ）、伊藤陽之介（長野高専）
1994	北　京 (中国)	27回総会	石田義博（郵政省）、高木相（東北大）、杉浦行（ＣＲＬ）、蓑妻二三雄（東京理科大）、岡村万春夫(ＪＱＡ)、近田隆愛（スタンレー）、結城主央巳(ＮＴＴDoCoMo)、黒沼弘（ＮＨＫ）、井上正弘（松下電器）、徳田正満（ＮＴＴ）、雨宮不二雄（ＮＴＴ）、伊藤陽之介（長野高専）、大島良夫（ＪＲ東日本）、川村武彦(日本テレコム)、岸本卓郎(日本電気三栄)、篠塚隆（ＣＲＬ）、鈴木健次(ＮＥＣ)、野田臣光（東芝）、平田健三（ＭＫＫ）、細谷泰（ソニー）、山路公紀（日立製作所）、富田誠悦（電力中研）、川崎邦弘（ＪＲ東日本）
1995	ダーバン (南アフリカ共和国)	28回総会	高木相(日大)、仁田周一(東京農工大)、徳田正満(九州工大)、加藤英二(郵政省)、杉浦行(ＣＲＬ)、篠塚隆(ＣＲＬ)、平田健三（ＭＫＫ）、岡村万春夫（ＪＱＡ）、緒方善郎（電事連）、富田誠悦（電力中研）、広島芳春（ＮＴＴ）、雨宮不二雄（ＮＴＴ）、結城主央巳（ＮＴＴDoCoMo）、和食暁（ＮＨＫ）、近田隆愛(スタンレー)、井上正弘（松下電器）、大島良夫（ＪＲ東日本）、川崎邦弘（ＪＲ東日本）、川村武彦（日本テレコム）、鈴木健次（ＮＥＣ）、野田臣光(東芝)、細谷泰(ソニー)、山路公紀(日立製作所)、西村隆雄(松下電工)
1996	マンデリュー (フランス)	合同委員会	高木相（日大）、仁田周一（東京農工大）、徳田正満（九州工大）、島崎俊隆(郵政省)、杉浦行（ＣＲＬ）、篠塚隆（環境電磁技術研）、山中幸雄（ＣＲＬ）、岡村万春夫(ＪＱＡ)、富田誠悦（電力中研）、雨宮不二雄(ＮＴＴ)、桑原伸夫（ＮＴＴ）、野島俊雄（ＮＴＴDoCoMo）、石井洋一（ＮＨＫ）、近田隆愛（スタンレー）、井上正弘（松下電器）、茂澤清行（ＪＲ東日本）、厚沢誠（ＪＲ東日本）、川崎邦弘（ＪＲ総研）、川村武彦（日本テレコム）、鈴木健次（ＮＥＣ）、野田臣光（東芝）、細谷泰（ソニー）、山路公紀（日立製作所）、高野安春（東芝ライテック）
1997	横須賀（日本）	合同委員会	高木相（日大）、仁田周一（東京農工大）、清水康敬（東京工業大）、徳田正満(九州工大)、越後宏（東北学院大）、杉浦行（ＣＲＬ）、岡村万春夫（ＪＱＡ）、近田隆愛（スタンレー）、野島俊雄（ＮＴＴDoCoMo）、井上正弘（松下電器）、雨宮不二雄（ＮＴＴ）、篠塚隆（環境電磁技術研）、富田誠悦（電力中研）、山中幸雄(ＣＲＬ)、鈴木健次(ＮＥＣ)、山路公紀（日立製作所）、細谷泰(ソニー)、高野安春(東芝ライテック)、川崎邦彦（鉄道総研）、小原正晴（ＮＨＫ）、後藤悦隆（電子機械工業会）、桑原伸夫（ＮＴＴ）、水野良之（電事連）、小川和之(矢崎総業)、多田紀一郎(三菱電機照明)、城戸大志（松下電工）、岡崎憲二(ソニー)、大島良夫(ＪＲ東日本)、工藤司(ＪＲ東日本)、比留間光一(電事連)、粕谷英夫(日産自動車)、市川裕二(トヨタ)、大岩克彦(デンソー)、岩渕康司（日立ホームテック）、森浄(オリンパス)、佐々木宏（松下電器）、篠原茂(電機工業会)、田路明(カシオ)、森利行(日立製作所)、長部邦広(松下通信工業)、山口輝彦(通信機械工業会)、大石亮(キャノン)、山口高(ＶＣＣＩ)、山口正徳（富士通）、長沢春美（日立製作所）、田島公博（ＮＴＴ）、小林隆一(ＮＴＴ)、中川稔也(ノイズ研)
1998	フランクフルト (ドイツ)	第29回総会	仁田周一(東京農工大)、徳田正満(九州工業大)、杉浦行（ＣＲＬ）、岡村万春夫（ＪＱＡ）、近田隆愛（スタンレー）、野島俊雄(ドコモ)、篠塚隆(環境電磁技術研)、雨宮不二雄(ＮＴＴ)、山路公紀(日立製作所)、井上正弘(松下電器)、高野安春（東芝ライテック）、鈴木健次（ＮＥＣ）、富田誠悦（電力中研）、川崎邦弘（鉄道総研）、小原正晴（ＮＨＫ）、岡崎憲二(ソニー)、山中幸雄(ＣＲＬ)、大島良夫(ＪＲ東日本)、比留間光一(電事連)、岩渕康司(日立ホームテック)、松井良明(スタンレー)、森利行(ＣＩＡＪ)、山口高(日本ＩＢＭ)
1999	サンディエゴ (アメリカ)	合同委員会	仁田周一（東京農工大）、杉浦行（ＣＲＬ）、岡村万春夫（ＪＱＡ）、近田隆愛(スタンレー)、野島俊雄（ドコモ）、篠塚隆（環境電磁技術研）、雨宮不二雄(ＮＴＴ)、山路公紀（日立製作所）、井上正弘(松下電器)、高野安春(東芝ライテック)、鈴木健次(ＮＥＣ)、富田誠悦(電力中研)、川崎邦弘（鉄道総研）、小原正晴(ＮＨＫ)、岡崎憲二(ソニー)、山中幸雄（ＣＲＬ）、岩渕康司（日立ホームテック）、勝山芳郎（富士通）、田島公博(ＮＴＴ)、水野良之(電事連)、堀内雄人（郵政省）

開催年	開　催　地		代　表　者　名
2000	サンクトペテルブルグ (ロシア)	合同委員会	仁田周一（東京農工大）、徳田正満(九州工大)、岡村万春夫(ＪＱＡ)、杉浦行(東北大)、野島俊雄（ＮＴＴドコモ)、近田隆愛（スタンレー)、篠塚隆（ＣＲＬ)、雨宮不二雄（ＮＴＴ－ＡＴ)、山路公紀（日立製作所)、井上正弘（松下電器)、高野安春（東芝ライテック)、鈴木健次（ＮＥＣ)、富田誠悦（電力中研)、岡崎憲二（ソニー)、山中幸雄（ＣＲＬ)、岩淵康司（日立ホームテック)、田島公博（ＮＴＴ)、塚本克己(電事連)、市野芳明(TELEC)、田上雅照(富士通)、矢島潔（郵政省)
2001	ブリストル (イギリス)	第29回総会	雨宮不二雄（ＮＴＴ－ＡＴ)、井上正弘（松下電器)、岩渕康司（日立ホームテック)、岡崎憲二（ソニー)、川崎邦弘（鉄道総研)、篠塚隆（ＣＲＬ)、杉浦行(東北大)、鈴木健次(ＮＥＣ)、田上雅照（通信機械工業会)、近田隆愛(スタンレー)、徳田正満（武蔵工大)、富田誠悦（電力中研)、長島芳行（電事連)、仁田周一（育英工業高専)、野島俊雄（ＮＴＴドコモ)、平伴善光（松下電工)、御園生勇（ＮＨＫ)、山路公紀（日立製作所)、山中幸雄（ＣＲＬ)、矢島潔（総務省)

ＥＭＣＣレポート　～岡村万春夫氏追悼文集～

平成13年12月10日　発行

編集発行　不要電波問題対策協議会
Electromagnetic Compatibility Conference Japan
〒100－0013　東京都千代田区霞が関1－4－1（日土地ビル）
社団法人電波産業会内
不要電波問題対策協議会　事務局
TEL　０３－５５１０－８５９６
FAX　０３－３５９２－１１０３
http://www.arib.or.jp/emcc

―無断転載を禁ず―